
笹本カウンセリング事務所

和風露カルタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笹本カウンセリング事務所

【Nコード】

N85180

【作者名】

和風露カルタ

【あらすじ】

僕の経営するこの笹本カウンセリング事務所には殺人者が来談者になっている。何故そんな事になっているのか。それは僕がする質問であって、僕が答える質問ではない、決して。

どうしてそうなったのか、どこをどう間違ったのか、言わば僕にも似た境遇に置かれた殺人者達は今日も笹本カウンセリング事務所を訪れる。

ブログというか、現状報告（前書き）

どうもこんにちわ。というか、初めまして。

と言うわけで、この作品が私、和風露タカルの初作品になるわけ
です。

どうか、温かい目で見えていただきたい所存であります。

ブログというか、現状報告

@

初めに記すべきであろう事なのでまずここに明記する。これは、超能力を持った僕が全能の神、ゼウスと戦う事になるまでの経路を記した物語である。という書き出しで始まる小論文を提出したら、担任に「後で職員室に來なさい」と言われたので、放課後職員室に行ったところ心配そうな顔をした担任が「ついて来て」と言うので、ノコノコ着いて行ったらカウンセリングルームにたどり着いた。

本気で探偵になろうと思いつて、為になりそうな本を十冊ほど買占め読破したら、ある日家に精神科医の先生とやっぱりカウンセリングの先生が居た。そんな事があつたから現実ではあまり這入る事のできない屋上に、鍵を盗んでこっそり忍び込んで寝転んでいると「早まるんじゃない」のオンパレードが聞こえてきたので立ち上がったところ、屋上の縁から足を滑らせて落ちた。目が覚めると、そこは、カウンセリングルームであつた。

@@

とまあ、カウンセリングの先生との関わりを多く持った人生を送ると大体こうなるのではないだろうか。今現在花の学生生活を終えて五年が過ぎた今、僕は、カウンセリングの先生になっていた。カウンセラーになっていた。

カウンセリング。それは、個人のもつ悩みや問題を解決するため、助言を与える事。精神医学・臨床心理学等の立場から行うときは、

心理カウンセリングと呼ぶ事がある。平たく言えば、身上相談である。

カウンセラーと言ってもその幅は中々広く、反復横飛びするには無理があるほどだ。病院カウンセラー、学校カウンセラーなどなど。しかし、先ほど述べた二つは臨床心理士の資格や普通教員免許が必要になるので避けた。出来るだけ早く親の期待を裏切りたかった僕は、アパートの一室を借り、自宅にした。そしてもう一室借り、大家さんに頼み、事務所にした。そこが僕のカウンセリングルームであった。

しかし、この事務所には少し困った噂が金魚の糞が如く纏わり付くので、クライアント、つまり来談者の層が極々わずかな物となった。

殺人者。

人殺し。

彼らもしくは彼女らは、阻害されて迫害されて世間から除け者とされてきた。しかしそれは間違いだ。殺人者も人間であり、人殺しにも感情がある。そして、心を病んだ殺人者もまた、人間と同じように救済されるべきである。少なくとも僕はそう思う。

誰もが嫌がる泥仕事や汚れ仕事は、誰かがやらなければならぬものなのだ。そしてその『誰か』が、何故そうなったのかは知らないが、この僕なのだった。

僕はそれを嫌がってはいないし、辞めたいとも思わない。そもそも、彼らには彼らなりの事情があるのだから、それを聞いてあげる事が僕ら『カウンセラー』の本来の仕事であると思う。

まあ、そんなわけでここ、『笹本カウンセリング事務所』を訪れる殺人者は後を絶えない。

第一話というか、幕開けの始まり（前書き）

これから本編というわけで作っていきたいと思いますので。。。よろしくおねがいします。。。

第一話というか、幕開けの始まり

@

十月の末、朝九時。

さて、そんなこんなで殺人者に限り来談を許してしまうと言う、限りなく汚名に近い二つ名を頂いたこのカウンセリングルームであるが、三日ぶりに訪れると異臭がしていた。

うちの事務所では取り合えず一度僕の自宅に訪れてもらい、その後事務所で話を聞く。というシステムを取っている。

ので、今回も例によって例の如く事務所に来てみたのだが。何だっけ？ 何したっけ？ 何が起因してこの卵を腐らせたような匂いをかもし出しているのだろうか。

「ああ、折角お越しいただいたのに申し訳ありません。出来れば、少しだけお時間いただけますでしょうか」

「あ、はい。勿論です」

——おかしいな。こんな、か細い通った声を出す女声が殺人を犯すわけが無いじゃないか。それとも、訳ありなのか？

と、そこで我に返り、そんな邪念を振り払い、今直面している問題、異臭へと立ち向かった。

@@

結果から言うと、腐った卵が部屋の中に落ちていた。何故、そんなところにそんな物があるのか、それ自体は本当に謎だ。だがしかし、個人的には何かの伏線であってくれと、なかなか赴きがあっ

ていいのではないかと思う。近所の子供達が悪戯をしたとだけは考
えたくない。

そして今、来談者を事務所の前に二十分待たせるといふ、カウ
ンセラーとしてはアクロバット極まりない無礼を犯した後、こうして
テーブルを挟んで向かい合う僕と来談者である彼女、ノキシタシキ
ノさんであるが。それにしても、真つ赤なワンピースにやたらツバ
の大きな帽子を被っている。一言で言うならば、ド派手なのである。
「えっと、家の軒下で、認識の識に乃でいいんですか」

「ああ、はい」

と答える声は少し震えていた。クライアントにはよくある事だが、
識乃さんのそれは少し違う気がした。緊張や不安ではなく、これは
……、酔っている様な。少し狂っているような。

「あの、笹本さん」

「あ、堅苦しいの苦手なので、どうぞトモと呼んでください。あと、
お互いに敬語やめましょうか」

「え？ いや、ああ、はい。どうぞ。私はタメ口とか苦手なので、
敬語を使わせていただきます」

「そうですか。いや、そう」

タメ口と言うものは、クライアントの不安を削ぐのにピッタリな
手法であり、カウンセラーはよく使う。と、そこで識乃さんが口を
開いた。

「私、宗教団体に入ってます」

「成程、そういう事か」

この女性、軒下識乃。この方の喋り方、服装。気になった点やお
かしな点。気持ち悪かった。外国の人間と喋っているような、そん
な気分。この酔った、狂った感じはそういう訳か。酔い狂う。宗教。
酔狂。

——じゃあ、本題だな。

と、居住まいを正し、改めて自分の名刺をテーブルに出した上で
本題に切り出す。

「さて、見ての通り、僕はカウンセラーです。あなたも何か迷い事や悩み事を持って、こちらを訪ねてきたのでしょうか。よろしければ聞かせてもらえませんか」

僕の雰囲気が変わったのを感じ取ったのか、識乃さんは顔を上げ、目を見開いた。

そして、帽子を脱いで膝に置き、一呼吸ついてからこんな事を口にした。

「私、ある人間を呪い殺してしまいました」

@@@

軒下識乃、十九歳。身長一五九センチ、体重四十三キロ。A型でおひつじ座。つまり、三月生まれ。二ヶ月前に宗教団体『裂けの羽』さけのはに入団。そこでの教えに従い、幼馴染の女性であるところの世崎賀呼さんかこを呪った。三日後、友達から賀呼さんの死を聞いたのだそうだ。勿論、識乃さんは本気で殺す気など無く、あくまで教えに従っただけなのだった。そうだ。

@@@

「その、なんだ。サケノバってのは、どういう集団なの？ 何で入ったの？」

「いえ、友達に誘われまして。入ってみたら、周りが言う程おかしな集団などではなく、むしろとてもいい方々で」

「周りが言う程？ それはどういう意味なのかな」

「えっ！ 知りませんか？ 聞いた事ありませんか」

「そういう噂を？ ううん、今はじ……」

「違います！ 裂けの羽、それ自体をです！ とても有名になって、新聞やテレビでも取り上げられてますよ」

「ああ、ごめん。そういう事？」

「本当に知らないんですか」

「僕よく、『世離れてますね。』って言われるんだよ」

「それ全然誉められてないですよ？ そんな自慢げな表情されても困ります！ 世離れて……。テレビとか見ないんですか」

「ごめん。見ないとかじゃなくって、テレビそのものを持ってない」「新聞は？」

「ごめん。読み物は好きなんだけど、お金かかるし取ってないんだ」

「携帯は？ 携帯でニュースとか見れますよね」

「携帯か。携帯携帯、携帯ねえ。あつ！ ポケベルなら持ってるよ」

「……」

「……」

「……」

「だってほら、電話は家があるし、外で会うなら場所とか時間をしっかり把握していればそんなに不便じゃないよ。それに初めから持っていないだから、不便かどうかも、そんなもの感じないし」

「じゃ、じゃあメールはどうするんですか？ 外に居るとき急用ができたら、やっぱり必要でしょう？ 電話だってできないじゃないですか」

「ふつ、最近の子は知らないんだね。公衆電話。あれがあれば外でも簡単に電話ができるんだよ。それに実はね！ 公衆電話でメールを送る事だってできるんだよ」

「でも、その公衆電話、最近じゃめつきり見ないじゃないですか」

「う、うん。それもそうだね」

「……」

「……」

「……」

@@@@

とまあ、このような与太話を続けて、はや2時間。会話と言うものは不思議なもので、一度脱線し、そこからもう一度脱線するともう本筋には戻れないものである。公衆電話が何故無くなったのか、という議論を交わし、携帯電話ショップの陰謀だ！ という点で落ち着き、その後、陰謀の意味、国家機密について、色々語り合った。そして、最後には何故か吉幾三の歌を二人で大熱唱して落ち着いた。

——識乃さんはすっかり良くなった。なんというか、病状が。狂った感じが取れてきていた。きっと、裂けの羽以外の人間と話す機会が無かったのだろう。

「さて、そろそろお昼時だね。今日のところはこれでいいと思うけど。少し通ってもらわないといけないと思うから、空いてる日教えてもらっていいかな」

「ああ、はい。勿論です。……、あれ」

首を傾げる識乃さん。可愛いな。

「まだ、何か」

「えっと、これじゃあ、ただの普通のカウンセリングと変わらなくないですか」

「……」

普通のカウンセリング受けたこと無いんだろっな。

「だって此処『笹本カウンセリング事務所』だもん。普通に当然でしょ」

「いやでも、私殺人者ですよ？」

「知らないよ、んなこと。」

「だっていろいろ聞きましたよ？ 事件を解決してくれるって」

「そうだね。僕は何の資格も持っていないから薬あげたりはできないんだけど、なんだったらいいい精神科の先生紹介しようか？ 僕、仲良しなんだよね」

「違います違います！ そうじゃないんです。そういう事で此処に来たんじゃないんです！」

「識乃さん。聞いて。僕は昔よく本を読んで、自分で書いたりもした」

「……急に何を言っているんですか？」

十分に間を持って、改まったようにして効果を持たせた。

「小学校のとき、作文の授業で小説じみた小論文的なものを提出した事があった。怒られたけど。その時はカウンセリングルームに連れて行かれたんだよ」

「はあ」

「それから僕は反抗意識で本ばっか読んだ。ライトノベルから参考書までもう何でも読んだ。そして、圧倒的な知識を頭に叩き込んだ中で探偵に惹かれた」

「探偵、ですか」

「そう。ここから僕には良く分からないんだけど、探偵に関する本を十冊買い集めて、二週間で全部読み上げた。すると家にカウンセラーと精神科医が来たよ。ははは」

「笑えないですよ。でも何ですか？ 『もつと現実を見る』とかですか？」

「うん、カウンセラーの方はそんな感じだった。でも、今言いたいのは精神科医の方なんだ。『君の集中力は異常だ。正常を逸している』と言われたよ」

「本十冊読んだだけじゃないですか」

「そうなんだよ。僕もそう思ったんだけど、ここでの問題は厚さなんだって」

「厚さ……」

「六法全集」

「六法全集ですか……。それでも、斜め読みすれば二週間で」

「ああ、一冊で六法全集」

「はあ！？ それは幾らなんでも無理でしょう」

「見せてあげようか」

「いえ、いいです。なんか落ち込みそうだから」

「そう」

「……」

「イデオ・サヴァン」

「？」

「イデオ・サヴァン。サヴァン症候群って言うんだって、この病気」

「病気なんですか」

「病気ってか、欠陥なんだよね。異常に頭脳が発達して、それ以外が手に付かなくなったり、障害になりやすいんだって。僕はまだ大丈夫だけど」

「いいですね、賢くなれるんだったら」

「確かにサヴァンの語源は『賢人』らしいけど、良くなんかないよ、決して。僕は本をパラパラと捲るだけで全て読めるんだよ。読めてしまっんだよ！僕はそれが当たり前だと思ってた。でもさ、精神科医に『あなたは異常です』って言われたんだよ？自分の常識が自分の信じてきた世界が、現実が、たった一言で打ち砕かれたんだ！分かるかい？己の全てを全否定されたんだ！それを、僕の母親はなんて言ったと思う」

「……」

「『やったじゃない！うちの息子が天才だなんて！』だって。はは、全く。笑っちゃうよね」

「先生……」

「……、笑っちゃう」

「……」

「笑いすぎてはらわたが煮えくり返る思いだったよ」
この後僕らは押し黙り、外の工事現場からの雑音だけが部屋の中を満たした。

@@@@

そして、部屋に掛けていた掛け時計が十二時を指して、8 b i t のメロディが流れた時、沈黙を破ったのは。というより、口を開いたのは、僕だった。

「さて、気を取り直して本題に入ろうか」

「へ？ さっきのは本題じゃないんですか」

「さっきの？ 余興じゃないの」

「余興！？ 今のシリアスなやり取りがですか！？ なんて性格」

「ほら、探偵になろうと努力した話したでしょ」

「そこなんですか！？ 本筋、そこですか！？」

「だからさ、僕は副業で探偵をやっている」

「それは、ぴったりの職業でしょうね。性格的に」

「うん、そうだね。だから、事件解決はそっちの仕事に入るんだけど」

「皮肉はスルーですか」

僕は立ち上がって、部屋に唯一ある机に寄って、引き出しの中からファイルを取り出し改めて、識乃さんに向かった。

「カウンセラー、笹本トモは殺人者のあなたに対して救済の手を伸べ、悩み相談を受けることを本意だとは思いません」

「はい」

「ですが、あなたが殺した。と言うのが嘘偽りであるのなら、僕はあなたを救済し、世に放つ事を約束しましょう」

「はい」

「あなたが言う呪殺、それが偽物だということを証明してもよろしいでしょうか？」

「は、はい！ 勿論です」

そして、識乃さんに金額一覧が書かれた書類を見せて続けた。

「では、その分の料金を探偵、笹本トモにお支払いしていただきます」

第二話というか、幕開けの終焉と第二幕の開演（前書き）

はい、どうも^^

読んでいただくと多分ほとんどの方が不満を抱く事でしょう；
ですが、取り合えず、最後まで読んでください^^

第二話というか、幕開けの終焉と第二幕の開演

@ @ @ @ @ @ @ @

十一月初めの週、午後零時と半時間。

「さて、君が初めてうちを訪ねてから、七日目の今日。四回目の診察というか何と言うか、まあ、駄弁りに来てくれている訳だけれど」
「はい。お世話になってます」

と、可愛くはにかむ識乃さんではあるのだが。

——ちよつと、ハイペース過ぎやしないか。僕だって人間であるわけ、更にあなたは探偵業にもお金をつき込んでいるでしょう？
こつちの身にもなってみようか。え？

「どうしました？ イライラしているように見えますよ？」

「いやいやいや、別にそんな事ないよ」

「頬引き攣ってますよ？ 貧乏揺すりしてますよ？ お悩みがあるんでしたら聞きますよ」

「そう、ありがとう。じゃあ、聞いてもらおうかな。実はね…、あれ？ 違くないかい？ これ」

大仰に腕を振って反論してみる。

「何がですか？ 私ならあなたの全てを受け止める事ができますよ」

「いや、その言葉も美妙的なニュアンスになってるよ？ 違うよ違う。立場がね、立場が逆に……」

「すみません。チヨコレートパフェ、一つください」

快活そうに叫ぶ識乃さん。そしてやってくるウェイトレス。そう、この昼過ぎに家の近くのカフェに来ているのだった。

「識乃さん？ 聞いているの？」

「何ですか？ トモさんも欲しいんですか？ すみません、この抹茶パフェも一つ」

「ねえ、ちよつと。僕もチヨコがいいんだけど。抹茶って君が欲し

いだけでしょ？　ねえ。なんで勝手に僕の注文決めちゃうわけ？
って何で普通に場違いなツツコミしてんだよ僕は！」

「ちよっと、周りのお客さんの迷惑になりますよ？　静かにしないと。あと、ノリツツコミはもうちよっと間を持ってやらないと」

「ああ、それはそうだね。ごめんごめん……、って何で僕が謝ってんだよ！」

「そうです、そうです。やればできるじゃないですか」

「最近さ、僕のストレス指数がすごい事になってるんだよね。何故かわかる……」

僕の言葉を遮って登場するパフェ二杯。

——なんだ？　世界が僕に逆光を浴びさせている気がするぞ。

「ほら、食べましようよ」

「う、うん」

食べた。黙々と。

抹茶味の生クリームの塊を十五分かけて。

その間、会話なし。皆無。

「さて、トモさん。調査の方はどうですか」

「君が仕切るのはどうだろうか」

「さて、トモさん。調査の方はどうですか」

「……、もう解決したよ。犯人も裂けの羽の幹部だったし、その裂けの羽自体も無くなっちゃったしね。」

「どういことですか？　それが本当ならテレビになってもいいよ
うな気がしますけど」

「外から見ても壊滅したかなんて分からないと思うよ。中はさすが
にひどい惨状だけだね」

そろそろ出ようか。と続け、会計を済ませ（勿論僕持ち）、外に
出た。

北へ進むと都会になり、洋服店やなんやらが立ち並ぶ。僕の家は
ここから南に進んだ所にある訳で北になど一切用事が無いのだが、
何故か僕の体は北へと向かっていた。というか、引っ張られていた。

「どこ行くのさ」

右腕をがちり掴まれ、斜めになりながら識乃さんに声を掛けた。

「トモさんの事務所じゃないんですか？」

「僕の家はあっちなんだけど」

「そうでしたっけ」

識乃さんは伸ばした僕の左腕、人差し指を見ようとせず、かといって足を止める気配も無い。少しずつ加速しているようにも見える。そして何より満面の笑みが怖い。

「いいじゃないですか。ちよつと寄り道しましょうよ」

語尾に音符が見えた気がした。

「だって君、財布持っていないでしょ？ てか何で持っていないの？」

「トモさんにつけておきますよ。ほら、私がトモさんにつけて、その分を依頼料から引いてもらえばそれでチャラじゃないですか」

「ああ、成程。それは良い考えだ」

「で、依頼の話をもう少し掘り下げて聞かせてもらっていいですか？」

「……っ！ ちょっと待て！ さっきの話じゃ僕が損するだけじゃないか！ 君の分を払って、何で僕がもらうお金は減っちゃうの！？」
吃驚した。君、詐欺師？

——危ねえ。普通に騙されそうになった。

識乃さんの顔を窺うと、笑みを保ってはいたが、目は笑っていない。笑ってない。笑ってない。

「ちつ！ ああ、そうなんでしたっけ？」

「『ちつ！』って言ったよね？ 今『ちつ！』って言ったよね？」

「で？」

「ああ。一昨日言ったように、君は殺人者なんかじゃなかったよ」と切り出した。

キョロキョロと周りを見回して、僕の話の聞いているのかいないのか分からないが、とりあえず話した。話し尽くした。

@

部屋の時計を見てみると、驚くべき事に午後九時半を示していた。外出しない訳ではないけれど、一日を通して外に出つ放しというのは滅多に無い事だった。そして何より、一日を通して一切本を読まないというのは初めてだった。

——事務所の鍵って閉めたっけ？

とても当たり前の事を頭に浮かべ、極々普通にベットに横たわった。「このチヨコレート、おいしいですね。形もビンみたいで可愛いですし」

勿論仕事も終わり、自宅に帰ってきているわけで。

「机とベットと冷蔵庫に洗濯機、それに数百冊の本。それ以外、本当に何も無いんですね」

夜行性では決していない僕としてはそろそろ就寝して、明日の朝に今日読めなかった小説を読みたいわけで。

「何で君がここに居るの？」

「へ？ 何がですか？」

そう言う識乃さんの顔は少し紅潮していた。

「え？ 何？ 識乃さん、酔ってるの？」

「はい？ 酔うも何もアルコールなんて飲んでませんけど」

「だって、顔赤いよ？」

識乃さんはもじもじと芋虫のように体をよじった。

「それは……、だって、トモさんの家に来てるし……」

識乃さんは組んだ手の指をクルクルと回しながら、僕の寝ているベットへと近づいてきた。その姿は普通の人では考えられない奇怪なものであったが、確かに僕の記憶でも彼女はアルコール分を摂取していない。

——さて、どうしたものかな。

普通の事を考えながら、体は少し緊張していた。

「識乃さん？　僕が一切勧めないのに寧ろ拒絶していたのにも関わらず、勝手について来た君を部屋にあげてしまったのは僕であるし、それに対して『何で君はここに居るの？』なんて自虐的なツッコミを入れたのも僕である訳だけど。これ以上はさすがに許されないよ？」

「ろんらろりいられんよ」

一切聞き取れない言葉を発しながら僕の上へと倒れかかって来る識乃さん。

「ちょまつ！　駄目だつて！　ねえ！　……、ねえ？」

識乃さんをどかして見てみると。

寝ていた。ぐっすり寝ていた。

「はあ」

体を起こしたついでにテーブルの方を見やると、何個かのウイスキーボンボンの包み紙が転がっていた。

——それ正確にはチョコレートじゃないんだよ。識乃さん。

「はあ」

@@

「ねえ、早く起きてくれる？」

朝六時。

——このお寝坊さんめ。早く起きろよ。

「ん、ん。あれ？」

「起きた？」

「ああ、はい。おはようございます。……、へっ！？」

識乃さんは一度起こした体を寝かせ、一度捲った布団をまた鼻辺りまで引き上げた。

「『何で、私の部屋にトモさんが居るんですか？』って聞いたなら、軽く怒りながら『ここは僕の部屋だよ。』と答えてあげるけど」

「へ？　なんでなんで？　何かしてませんよね？」

「ああ、大丈夫だったよ。ほら、部屋も荒らされてないし」と身振りで表現してみる。

「違います！　トモさんが！　私に！」

「そっこの自意識過剰って言うんだよ？」

布団の口を捲って、自分の体を視認したのであるう、識乃さんが叫んだ。

「着てない！」

「静かに！　ここ、壁薄いんだから。近所迷惑でしょ？」

「ああ、すみません。……じゃなくて！」

「何を怒っているの？　服、着てるじゃん？」

識乃さんが被っている掛け布団を一気に剥いで、そのまま押入れに入れた。

「きゃっ！　って、そうじゃなくて、なんで私は昨日の服を着てないんですか？　なんで私は男物の服を着ているんですか？」

——家事をして忙しそうにしている男によくそう、色々と質問できるな。

「はい。朝ご飯できたから、座って」

テーブルの両側に朝食を並べると、識乃さんも大人しくテーブルについた。

そして、いただきますと声を合わせて言った後、ご飯を口にしながら識乃さんが言った。

「で？」

「だから、君が動きにくそうなオシャレな服装のままベッドに倒れこんじやったから、僕の持ってた比較的動きやすい服装に着替えさせてあげたんだよ」

「ぬ、脱がしたんですか！？」

「脱がさないで、どうやって着替えさせるのさ」

えっと、と識乃さんが少し困った顔をした。

「し、下着は？」

「下はさすがに脱がせなかったけど、女の人って寝る時、ブラ外すんでしょ？ 本で読んだ」

「じゃ、じゃあ、私の裸見たんですか！？」

「半裸だけだね。仕方ないでしょ？ 目瞑って着替えさせられないでしょう？ ってか、人のうちに勝手にあがって、ウイスキーボンボン三つを勝手に食べて、人のベッドで勝手に寝てしまったのは君でしょ？」

識乃さんは顔を真っ赤にしたが、ある程度冷静ではあるようでそのまま言葉を紡いだ。

「その服はどうしたんですか？」

「どうするって、洗濯したけど。ああ、大丈夫。僕の服とは別にしたし、それぞれの正しい処理の仕方は知ってるから」

「今鳴ってる、あの洗濯機の音ですか？」

識乃さんがビシッと洗濯機の音が聞こえる方向を指差した。

「そうだね」

「ああああ、これは私の一生の恥です。私、今日一日この服装ですか？」

「昨日、いっぱい服買ったでしょ？」

「そうでした……ね」

@@@

「で、何を急いでいるんですか？ こんな朝っぱらから」

着替えた識乃さんは、なかなかキュートだった。上半身に、全体がふわっとした大きめな白いカットソーを纏い、その裾からショートパンツを覗かせている。太ももから下は黒いニーソックスに覆わ

れている。可愛らしく、それでいて幼すぎない大人びた魅力も感じられる服装だった。

「今日は、カウンセリングの予約が入っててね。朝の九時から」
身支度をしながら、簡単に答える。

「珍しいですね」

「君が言うな」

そういう僕は、黒めな色のジーンズを穿き、インナーとしてティ
ーシャツを着、アウターとして白衣を纏っていた。

「私もついて行っていいですか？」

「おお。ちょうど僕から頼もうと思ってたんだよ」

「いいんですか？ 絶対『だめ』って言われると思ったんですけど」
「君、大学辞めてるんだってね？ かと言って、就職もできていな
い。バイト生活の中で疲れたからサケノバなんてに入っちゃたん
でしょ？」

「……っ！ なんで」

さっきまで座って僕と会話していた識乃さんがガバツと立ち上
りながら驚いた。

「いやあ、あのね。昨日君が寝ちゃった後、酔ってる君を叩き起
して色々話を聞いたんだよ」

「はあ、そうだったんですか。一切記憶に無いですけど……、あれ
？」

「うん。実は僕が着替えさせたつてのは、嘘、なんだよね。服渡し
たら自分で着替えてくれたから、君が」

はははと笑って誤魔化そうとした、が。

バチンツという乾いた小気味良い音が響いた。伸ばした腕を振り
切った形で居る識乃さんを見る限り、その音源がどこであるかは言
うまでも無いだろう。

九時二十分。

「さて、改めまして。僕がカウンセラーの笹本です。こっちが助手の軒下識乃」

「はい、よろしくおねがいますです」

「トモさん、ちょっとこっちに」

扉の方に立っていた識乃さんが手招きしていたので、少々お待ちくださいと言いついて残して、識乃さんへと向かう。

「どういふつもりですか？ 私が助手だなんて」

「さつき君が勝手に怒って話が終わっちゃったから最後まで言えなかったけど。だから、そういう事だよ。仕事もないし、僕への借金もある。だからここで働こうよって話だよ」

「成程。私の意見は無視なんですね」

笑顔が怖い。笑顔が怖いよ、識乃さん。

「それにあたって、僕は今後君を『識乃』か『識乃ちゃん』って呼ばなくちゃならないんだけど」

「いやいやいや、ならなくないですよ。って言うかだいたい……」

「ああ、それより聞いて、識乃ちゃん。ほら見てよ、この立派な紅葉」

と自分の頬を指差して、そう言った。

「わあ、本当ですね。大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。クライアントを待たせちゃ悪い。早く行こう」

「そうですね」

そそくさと席に戻る僕。ソファの横に立つ識乃ちゃん。

クライアントが如何わしげな表情をしていたが、そんな事を一々気にしていられるほど僕の心は広くない。

「大丈夫ですか？ 先生」

「ああ、はい。大丈夫ですよ？ 万事オツケー」

目の前のクライアントの男性、たまちこうじん多町幸甚さんは、よっぽどの汗っ

かきのようで、額に滴るほどの汗をかいていた。

「電話で御伺いしたとおりで間違いないと思いますが、一応形だけ、ご用件を」

「はいです。えっと、ご理解いただくにはまず、うちに来ていただかなければならないのですが」

「ええ。」

「一番簡潔にした受け答えで結構なでしたら、わたくしはこう言いますです」

一息ついて多町さんは言った。

「今現在、わたくしの家に遺体が二体あるんです」

第二話というか、幕開けの終焉と第二幕の開演（後書き）

どうでも良い話ですが、軒下識乃って名前は回文になっているんですよね^^

上から読んでも下から読んでもノキシタシキノってやつですね。

はい、すみません。ごめんなさい。『識乃さんの解決編はどこだ！』って話ですよ、はい。

あの、今後の活動で出したいと思っていますので許してください。その分、ギャグパートを推してますのでどうかご容赦ください。

第三話というか、第二幕の暗転（前書き）

多少本格化してきたといいますが、シリアスな内容になってきます。

今後の伏線もぼろぼろと出していきますので、疲れるとは思いますが、どうぞ最後まで読んでくださいますか^^

第三話というか、第二幕の暗転

@@@@

多町幸甚、三十八歳。身長一六五センチ、七十八キロ。A OのA型。五月生まれの雄牛座。幸甚という変わった名前で虐められた過去を持ち、人ごみに居ると孤独感を覚えるそう。一昨日、家に居ると見覚えの無いダンボール箱が二箱届いた。聞き覚えの無い化粧品メーカーから届いていたそれはあまりに重く、不自然に思ったため開けてみると、それぞれに女性の遺体が入っていたそう。そこで、うちの事務所の噂を知っていた多町さんは、予約を取った。らしい。

@@@@

多町さん宅。時計を見ると、十時過ぎであった。三十分歩くだけで着くような距離ではあったのだが、あまり僕の使わない道ばかりを通ったので、見ればそこは全然知らない街だった。

「うゝ、寒いね」

「十一月にもなると、もう冬なんですかね？」

と声を掛け合いながら、上着を脱ぐ僕と識乃ちゃん。

識乃ちゃんには黒いダウンジャケットを貸していたので、識乃ちゃんも勿論それを脱いでいた。だがしかし、ダウンジャケットがショートパンツを隠し切っていてエロティックな風貌になっていたの
で、もう少し見ていたかったと言うのも本音であった。

「……、変態」

「変態言つな！　というか、心を読むな！」

「お二方、こちらです」

上着を片付ける、と言つて一度奥に行っていた多町さんが戻つてきて言つた。

「では、失礼します」

と頭を下げて言う僕。

「おじゃましまーす」

と言いながらピヨンと玄関にあがる識乃ちゃん。

案内されて、玄関左側にある部屋へと入った。そこはリビングだった。あらかじめ言っておくが、これは推理小説であり、間取りやら家具の位置などが後々の伏線へとなっている可能性があるので扉の位置から見て説明しよう。

押しの扉を開けると、左側に空間が広がっており、そこは幅四メートル、奥行き七メートル程の部屋であつた。僕の今いる扉が北側であり、向かつて左に、部屋を中心を向いた四二型のテレビがある。西側の壁全てが横開きの扉になっており、南側と東側の壁には窓が付いていて、それぞれの窓の前に二人掛け用のソファがあつた。そして部屋を中心に四角いテーブルがあつて、その下には卸したてなのだろう、ふわふわな冬用の絨毯が広がっていた。

「では、こちらに座ってくださいです」

と僕と識乃ちゃんは東側のソファに座らされた。そして、多町さんは西側の絨毯へと腰を下ろした。

「ソファに座らないんですか？」

と聞くと、結構です、と返された。

「早速ですが、見ていただきたいものがあるです」

「その前に！　この家の間取りを教えていただいてよろしいですか？」

余りにも早く本題に入ろうとしたので、遮つて確認しておきたい事項を問うた。

「時間が無いのです。が、少しだけならいいです」

「お願いします。まず、その後ろの部屋は？」

と多町さんの向こうを指差した。

「ああ、ここはダイニングとキッチンです。お客が来るという事でリビングにあつたものを押し込んであるので余り見せたくないのですが。」

「そうですか。では、玄関の右側の部屋は？」

「応接間です。というか、お客様用の部屋になってますです。布団とか、お泊まり用の物も押入れに入ってますです」

「成程。では二階は？」

「二階は……、そうですね。ちょっと上がった事が無いので分からないです」

「なぜ？」

何故か、識乃ちゃんが聞いた。置いてけぼりが嫌だったのだろうか。

「ルームシェアって言うんですか？ 二階はもう一人の居住スペースになってるんですよ」

「はあ、そうなんですか。その方は？」

「この時間には居ないですよ。仕事が忙しいようで」

「そうですか、玄関正面には廊下が伸びていましたか？」

「お風呂やトイレがあつて、奥で左に折れていてここに繋がってますです」

「そうですか」

と、少し押し黙っていると、そろそろいいですか？ と多町さんが言った。

「あ、はい。ありがとうございます」

「では、こちらを」

と多町さんは南側のソファを軽く動かし、その下からダンボール箱を取り出した。この部屋に入った時から気になっていた代物だ。

「これが言っていた例の……」

「もしかしたら……だから、識乃ちゃんはちょっと待ってて」

「あ、はい」

識乃ちゃんの返事を聞いてからダンボールへと向かい、多町さんに声を掛け、ダンボールを開けてもらった。

女性が入っていた。しかしそれは、ライトノベルなんかに出てくるような『郵送物を開けると美少女が』なんて物では決してなく、それでいて、『ドラム缶の中にコンクリート詰めにした変死体』のような残酷な物でもなかった。

ポリエステル系合成樹脂でできた透明な袋に入った女性だった。

先述の背骨から二つ折りにされた、優麗な全裸女性だった。

@@@@@@@

十二時十分前に多町さん宅から追い出されるように出てきた僕らは事務所への帰路についていた。識乃ちゃんは直接家に帰ってもよかったのが、何せ彼女の衣服が僕の家にあるのだから仕方ない。

直接事務所に帰り、衣服を識乃ちゃんに返し、今日の日記を付け読書をしつつ静かに僕を襲う睡魔に体を委ねるのも悪くない。と、午後からの予定を練っている所を隣からの声に遮られた。

「あ、お寿司屋さんだ！ 行きましよう、お寿司食べたいです！」

前方右側に回転寿司屋を見つけ、テンションがアップする識乃ちゃん。

「なんで、んな元気なの？」

「何がですか？」

「言っておくけど、もし寿司を食べに行ったらとしても僕はお金払わないよ？」

「えっ！ 本当ですか？」

識乃ちゃんは口に手を当てた。

「意外に思う意味が分からないんだけども」

「嫌です！ 嫌です！ 払ってもらえないと行かないですよ？」

「いや、僕別に行きたくないし」

「なんですか！ この、ちりめん白衣め！」

と意味不明な罵倒を浴びせるだけ浴びせて、ぷいっと顔を左へ背けてしまった。そして、顔を向けた方向にあった電信柱に貼り付けてあった『体で愛を売ります。ラブドール輸送販売……』という内容のチラシを見つけ、瞬間的に顔を赤く染めた後、卑猥だ、だとか、いかがわしい、などど一人でぶつぶつ言っていた。

@@@@@@@@

——僕が触れた、あの女性には確かに脈は無く、弾力のある人肌は凍えるような冷たさになっていた。軽く、多町さんにばれぬ様にダンボールを蹴ったりしてみたが、その重量は間違いなく人間のそれであった。しかし人間の体内には内臓があり、更には骨があり、あんな携帯が如く二つ折りになるわけが無いのだ。死体臭もしなかった。袋に入っていたからかもしれないが、それはそれで、体内のガスが六穴から抜け出てその袋が膨れ上がるものなのだ。切開して体内の処理をしたかとも思ったが、彼女の腹にそんな傷跡は見出せなかった。体が後ろ向きに、顔を上向けに折られていたというのも気になる。背中にか隠されているのだろうか。

そもそも、彼女はいつ頃殺されたのだろうか？ いや、言い方が悪かったか。

彼女はいつ頃亡くなったのだろうか？ ずっと前に亡くなったと言われても納得できるが、昨日命を落としたようにも見える。そもそも亡くなっているのかどうかも怪しいような容姿であった。目は閉じていたが、その表情は無であり、無表情であった。特に苦しんだ後に亡くなったようではなかった。毒殺だったのだろうか？ 絞

殺では無さそうだが。

だめだ、だめだ。何故だか、他殺の線ばかりを考えてしまう。もっと他の可能性、この状況になり得るプロパブリティーは何なのだろうか。

時に、多町さんが怪しい。怪しすぎる。一応、名刺を貰って帰路に付いたのだが、何か隠している気がする。遺体を一体しか見せてこなかったことにも何かあるのだろう。それよりも、化粧品メーカーから送られてきたというあのダンボール、しっかり調べてみたわけではないが、何か臭い。事件の匂いでは無く、もっとこう、簡単な問題のような……。二階へと続く階段も見つける事はできなかったし、見つけさせようとしていなかった気がする。いや、見つけさせないようにしていた気がする。二階に何かあるのだろうか。

ともあれ、あと幾度か事務所に足を向けるように釘を刺したし、名刺も貰った。後の事は後々考えさせていただろうか。だが帰り際、『昼は忙しいので、電話は真夜中から時計の短針が一周するまでお願いします』と言った彼のその真意は何だったんだろう。それも後々本人に聞こうかな。今は目の前の問題に頭を使うとしよう。

「何皿食べる気？」

「さあ」

「『さあ』って。よく食べられるね、あんなの見た後で」

結局この少女は、好奇心に負け、ダンボールの中身を覗いたのだった。

結局僕は、回転寿司屋で十八枚の空皿を前に微笑んでいる少女と対峙させられていた。

「しかし、綺麗でしたね。あの死体」

「まあ、あり得ないわけじゃなよ。古代ミイラは鼻から脳みそをかき出して、内臓だつて体の穴から抜き取った末にあの形になるんだから。遺体に傷つけず中身进行处理する事自体はそこまで難しいものではないんだよ」

「食事中ですよ、トモさん」

「君が振ったんだよ」

なんだか居酒屋のような寿司屋だった。こじんまりとした店の中にカウンター席とテーブル席が『所、狭し』と声を上げている。店の片隅には地デシ対応済みのテレビがあり、店主のこだわりであることが一瞬にして分かった。そのテレビ画面では、アイドルの様に美しいニユースキャスターが月見里獏也^{やまなしほくや}の死刑が決定した、と報じていた。そのニユースに僕はハツとしたが、何の気まぐれなのか店主がチャンネルを変えてしまった。

そして映し出されたのは、今売れているアイドル、白河真琴。猫目と太めの眉が大人っぽさを演出していて、少し低い鼻と丸っこい輪郭とが、あどけない幼さを残していた。そして、それらを可愛らしい栗毛が覆い、全体のバランスを繕っていた。ポップな音楽に合わせて踊る女子高校生に心躍らせるような趣味を持っているわけではないが、それでも彼女の可愛さに少し見蕩れてしまった。

——しかし謎だ。

彼女の色と言っても過言ではない程似合うパステルピンクのミニスカートに纏い、彼女は派手に踊り、時には側転を披露し、『むしろダンスがメインなのでは?』と思わせるような激しい動きを見せた。いや、魅せた。しかし、何故だろう。スカートが捲れる事が一切ない。別に期待している訳ではない。むしろ逆に心配をしているぐらいなのだが、その心配をことごとく振り払うように、そのスカートの中が危ぶまれるような事はなかった。

——きつと、これをコマ送りで見たりする高校生が居るんだろうな。「出倒してますね、真琴ちゃん。ファンとしては誇らしい限りですよ」 やっとお腹がいっぱいになったのだろう、識乃ちゃんが顔を上げた。

「君が育てたわけじゃないでしょ?」

「あ、そうだ。知ってますか? 真琴ちゃん、最近、彼氏ができたらしいですよ?」

「そうなんだ」

「いや、噂程度なんですけどね？ 屋上近くの階段で男子にお弁当を渡している姿を、真琴ちゃん先輩アイドルが写メったんですって」

「ふうん。アイドルも大変だね」

ここで僕が宣伝する必要は一切無いとは思うけど、もしかしたら興味のある人が居るかもしれない。彼女、白河真琴のことが気になるのであれば、これを読み終えた上で『小説家になろう』内で探してみるという。

メタ視点は置いて。

「注文したのに、来るのが遅いです」

と、声を荒げる識乃ちゃんをなだめることにしよう。

「それが戦略なんだよ。わざと流すのを遅くして、その間にその他の商品を食べてもらおうってね。回転寿司なんて、一皿でそんなに利益なんて出ないから、数で勝負したいんだよ」

全部、聞こえてるぞ。と言わんばかりに店主に睨まれた気がしたが、そんな事は無いだろう。

「はあ、成程」

「世界にはたくさんの仕事があるけれど、それらがそれぞれ独自のチートを使って利益を生んでいるんだよ」

「いやな事聞いた気がします。ところでトモさん」

「何？」

「なんで、多町さんからカウンセリング代しか取ってないんですか？」

「ううん、今回は探偵の部類に入らない気がするんだよね。多町さんからも依頼受けたわけじゃないしね」

「私への当て付けですか？」

「うん、人の話を聞こうか識乃ちゃん」

「ふはあ、食べました食べました」

僕の返事も一切聞かず、満足そうに微笑む識乃ちゃん。彼女の前に積まれた皿は…二十二枚。

「食べすぎだよ！ 太るよ！」

「ああ大丈夫です。私、食べても太らない体質なんで」

識乃ちゃんは立ち上がり、レジスターを通りすぎて店頭にて立ちどまった。

——僕も財布に一切の傷を負うことなくそっち側に行きたいよ。

識乃ちゃんに僕の心の声が届くはずも無く、目を合わせると微笑んでくる始末。

——何で、百円均一じゃないんだよ。百二十円均一ってなんだよ。

私営の店だから仕方ないのかもしれないが、そういう僕の前には十枚前後の皿が積み重なり、計、四千三十二円の出費となった。そして、店主に一瞥した後、店を出た。

しかしこのお店の名誉にかけて一つ言っておこう。この店のネタはただ高いだけの店などではなく、寧ろ百二十円じゃ安いかもしれない、と思えるほど美味であり無類であった。

第三話というか、第二幕の暗転（後書き）

第四話はもうちょっとあとの投稿になるかと思っています^^
では、感想・評価を願わくば。

と思いつつ、さっさと執筆させていただきます。・・・、

第四話というか、第二幕の展開（前書き）

識乃ちゃんのボケ率が半端なくなってしまった。そして、いつの間にか、トモが匂いフェチに…… ^^ ；

第四話といつか、第二幕の展開

@@@@

帰宅。

午後一時四十分。

寿司屋を出た後、僕は識乃ちゃんの友達が悪口や嫌な噂を延々と聞き続けた。自宅に辿り着いた頃には耳に胼胝ができていたのではないだろうか。

……、慣用句の使い方が間違っている事など百も承知である。

——女の子は皆、裏ではこんな感じで友達を語っているのかなあ。
識乃ちゃんからダウンを返してもらい、少し残った香りを楽しみながら、クローゼットへと向かう。先日、識乃ちゃんが『机とベッドと冷蔵庫に洗濯機、それに数百冊の本。それ以外、本当に何も無いんですね』的な事を言っていた気もするが、さすがにそれは言い過ぎだ。読者諸君、驚くなかれ。僕の部屋にはクローゼットがあるのだ。更に、壁には時計が掛かっている。事務所にある *8 bit* のメロディを出すあんな物では無く、シックなデザインの掛け時計。

まあ、兎に角。

クローゼットへダウンとジャケットをしまい、識乃ちゃんを部屋へと招きこむ。今朝怒って識乃ちゃんが先に出て行ってしまった後に干した識乃ちゃんの衣類を取り込んで、

——ああ、これを干したのって今日の事か。ずっと前に干した気がする。

と、物思いにふけた。そして、ふてぶてしくも僕のベットに腰を下ろしている識乃ちゃんの向かって差し出した。

洗濯した衣類と言うものは勿論濡れている訳で、ベランダに干すのが常識、世の常、世の常識。だと思っていた。が、識乃ちゃんは

ベランダから戻ってきた僕を見るなりこんな事を口走った。

「べ、ベランダに干してたんですか!？」

当然でしょ? と答えると、識乃ちゃんは顔を赤くしてベットの
上で暴れたした。

「ちよつと止めてくれるかな。そこは、君の『友達秘密話』でやつ
れた僕の体を休める憩いの場なんだよ?」

「五月蠅いです! どうしてくれるんですか!？」

——おつとお? 識乃ちゃん、何で目じりに涙を溜めているんだ?
「私がこの部屋に入っていく所を見た近所の人たちは私の事を『軽
い女だ』みたいな目で見ることになるんですよ!？」

「識乃ちゃん、確かに口は軽いよね」

はははっ。と笑ってみたら、顔面が枕にめり込んだ。識乃ちゃん
が投げた僕の枕であつた。

落ちた枕を拾い上げ、識乃ちゃんを見やると彼女の感情は頂点に
達していた。その感情が悲しみなのか恥じらいなのか、はたまた怒
りなのか、それはよく分からなかったが。識乃ちゃんは真つ赤なほ
つぺたをぶくつと膨らまし、その頬を多少の涙が滴っていた。そし
て、少し垂れ目な目を必死に吊上がらせ、上目使いで睨んできた。

読者諸君。

結局、僕が何を言いたいのか分かるだろうか。

怒った識乃ちゃんは最高に可愛かったのだ。

@x10

——しかし何だったのだろう。

様々な大きさ、形のテレビを見ながら考える。

識乃ちゃんの渾身の顔を記録しておこうと、『サケノバ事件』の
戦利品であるデジタルカメラで激写したところ、なんだかよく分

からない言葉と動きで喚きながら帰ってしまった。

まあ、それは良いのだが。

今から少し時間を遡る。

識乃ちゃんが帰り、時計の短針と長身との角度が九十度を作り成そうと必死になっている時刻。つまり、昼の三時である。多町さんには『昼の間、忙しいので電話はやめてください』と言われていたが、次のカウンセリングの日程を一切取り決めていなかったの仕方なく電話を掛けさせて頂いたのだ。すると、なんだか多町さん是不機嫌だったようだ。五回の呼び出し音の後に僕がもしも、と言うと『なんだ？』とぶつきらばうに返された。

「ああ、いえ。ちよつと確認事項がありました」

「……、すまん。また掛け直してくれ。えっと、明日の朝に頼む」「いや、すぐ終わりますんで……」

ブツ

電話は無造作に切られた。それだけだった。それだけの会話しかなかった。

そして。

そして僕は今、大型家電量販店に来ているのだった。テレビの右上の表示を見ると、そろそろ五時になろうとしている時間らしい。しかしこういう店舗には窓が無く、空の様子が窺えないので、『今は夜中の十二時ですよ』と言われても信じられる自信がある。

まあ、ともかく。

僕は家電量販店が好きなのだ。『ここに住んでいい』と言うのであれば、即刻住民票をここに移そうではないか。何せ、僕の家が無い物がたくさん並んでいるのだ。それに広い。家電達にも『所、狭し』と騒いでいる様子は見られない。何よりもテレビがある。別に僕も好き好んで時代に遅れる生き方をしているわけではない。当たり前だ。ここに来る事は、時事的な物事を知ることのできる大きな機会なのである。

……。

そうだ、弁解しなければならぬ事がある。僕は、僕が関係を持つまで『サケノバ事件』の事を知らなかった訳ではあるが。それは諸事情によりここに来る事ができなかった事が起因する。

ヤマシバクヤ
月見里獏也。

月が見える里には山が無い。故に『やまなし』。昔の人はよく言ったものだ。

そして。

悪夢を喰らい邪を払う、熊・象・犀・牛・虎の部位を授かり受ける空想上の動物。獏。

そんな頓智と頓智を掛け合わせた様な名前を持つ彼は。

——もう居ない。

死刑という、権力の鎌掛けを受けた彼は。

——もう、どこにも居ない。

僕の初めての親友であり、天敵であった月見里。救世主であり、殺人者であった獏也。どこにも居なくなってしまったあいつは今、どこに居るのだろうか。

.....。

さて。

物思いに耽るのも、もういいだろう。

各テレビに映し出される情報番組が、何故だかとてもつまらない。

——そろそろ、外に出ようかな。

出口に向かおうと回れ右をした所、予想外な人物に出くわした。

@x10@

帰宅前。というか自宅前。

今日も一日疲れた。と、黄昏ながら帰路に着いていた。自分のアパートが近づいてきたので、顔を上げ僕の部屋を見上げると、何故

か窓から明かりが漏れていた。消し忘れかとも思ったが、その光を時たま人影が遮るのを見ると、そんな悠長な考えもすぐに吹っ飛んだ。

——なんだなんだ？今日はやけに変な事が起きすぎていないか？

ジャケットの裏側の専用ホルスターから刃渡り十五センチの鋏を取り出し、支点部分のロックを解除する。二本に分解したそれぞれの刃物を一本ずつ両手に構え、静かに階段に近づくと、一〇五号室のドアが開いて、ご近所さんの顔が現れた。

「あ。笹本さん。どうも。こんばんわ」

さほど親しくもない人に向ける様な素っ気無い挨拶は愛嬌である。こちらからも簡単に挨拶を返したのだが、達真美たちまみさんの視線は僕の右手と左手を行ったり来たりしていて、僕の言葉を聞いているようには見えなかった。

急な出来事で完全に忘れていたが、僕の両手には刃渡り十五センチ、柄の部分を入れると二十五センチ程になる大きな刃物が握られていたのだ。そんな豪快に銃刀法を違反している男と対峙しているのだから、まともな思考力を維持する方が難しいだろう。

「あの、なんだったら警察に通報しましょうか？」

「いやあ、そういうのは本人に聞くものじゃないですよ？」

達さんの動揺は僕の思った以上だったようだ。構えていた刃物を下ろし、柄の輪の部分に小指、親指以外の三本を通し、刃物をぶら下げる状態にする。

賭け事好きの二十九歳の彼女はいつでもポーカーフェイスなので感情の抑揚が見えにくい。スツと通った鼻筋、少し尖った耳、遠くを見据えているような透き通った瞳、切れ長の眉、小さな唇、それらのパーツが笑いによって歪む場面を未だに僕は見た事が無い。

「いえ。そうじゃなくて。上の階です。あなたの部屋」

「ああ、そういう事？ 大丈夫ですよ。あまり大事にしたくないですし」

やっぱり。というか、一切動揺などしていなかったようだ。僕の

部屋、自宅の方は、二〇五号室なので彼女の部屋の真上なのだ。誰かが僕の部屋にいる事に勘付いたのだろう。

因みに事務所は、二一〇号室である。立地条件のおかげか、随分と安い家賃であるのに部屋の中はとても広い。敷地のそれ自体もとでも広く、二階建てでそれぞれに十個の部屋がある。折角の機会なので、ここでもう少し、説明しようか。

……………。

現状を思い出す。そんなちなけな事をいている暇はない。達さんに声を掛け、刃物を鋏を構え直したところで達さんの右手に包丁が握られている事に気付いた。

「……、えっとー、今からどうするつもりだったんですか？」

「やっぱり、警察は駄目と思ひまして。しかし。あなたは帰ってこない。さすれば願わくばわたしが先方に奇襲をば。」

「……」

——うん、勇敢すぎるぜ！

どこの世界に、謎の侵入者に包丁一本で立ち向かう華奢な女性が居るのだろうか。

——そして、彼女ならば勝ちそうな気がする。

「あの、僕の部屋が血で染まるのはいただけないから、ちょっと下がってもらっていいですか？」

なんだか刺されそうな気がして、敬語が更に丁寧になってしまふ。自然に。

「分かりました。では。お気をつけて。健闘をお祈りしています」

そのまま部屋の中に引っ込んでいく達さん。

別に戦う気は無いけれど、任せてくださいと、小声で呟き、階段を一段一段踏みしめる。階段は一階の一〇五号室の前から二階の二〇六号室の前まで伸びているので、二階に辿り着き、自室の前まで少し歩く。壁にへばり付くようにして窓から中を窺うと、……だめだ。すりガラスなので何も見えない。人影がゆらゆらと動くのだけが窺える。

二本の刃物の柄を左手の中指と人差し指通して持ち替えて、ダガーナイフの様に握りこむ。右手でドアを開く為である。

あえて、気付いていないように、ただいまと、声を上げて返事を待つ。普段ならば、こんな寂しがり屋の一人過ごしのティーンエイジャーのようなことはしないのだが。異臭が漂っている事に気付く――なんだ？ 焦げた匂いがするけど。放火か！？

一瞬焦ったが、すぐに落ち着きを取り戻し、頭の中を整理した。そして、思い至った。

そもそもプロフェッショナルが電気など点けるであろうか、と。そして嫌な予想は良くて的中するものなのだった。

「お帰りなさいっ！」

知った声が聞こえてきて、僕は肩を落とすような、竦めるようなそんな動きをした。

「うん」

あえて当たり前のような反応をして、ベッドへと足を向け、腰を下ろした。

「ご飯にします？ それともお風呂ですか？」

「へえ、じゃあお風呂で」

うちのアパートには風呂が無い。僕は二、三日に一度、最寄の銭湯を利用しているが、他の住民がどうしているのかはよく知らない。すると、目の前に居る女性が（勿論識乃ちゃんであるのだが）、予想通り、困ったような顔をした。

「お風呂……、ですか。どこにあるんですか？」

僕は実は大袈裟な身振り手振りで懇切丁寧に説明してあげた。

「離れにお風呂があるから、焚いてきて欲しいんだけど。良い？ 離れに行くにはここを出て、北に向かって十二キロ先に交差点があるからそこを右に曲がって。そのまま真っ直ぐ進むと十分ほどで突き当たりになってるんだ。そこを今度は左に曲がって、そのまま山の麓まで進んでくれればいいよ」

分かりましたっ！ と、叫んで飛び出す識乃ちゃん。

はあ、と息を吐き出し横になる。寝返りを打って俯きになったところでハツとする。

——これは……っ！ 識乃ちゃんの香りっ！ そうか、昨日ここで彼女寝たんだ。

そのまま五分程、鼻だけで呼吸を続けた僕は顔を上げて驚いた。

「や、やあ」

「……」

識乃ちゃんが、見ていて辛くなるような瞳で僕を睨みつけていた。

「涎、出てますよ」

「そんな低いトーンで言わないでくれ！ そして出てない！」
がばつと起き上がり、反抗の意志を見せる僕。

「識乃ちゃん、離れに行ったんじゃ？」

「大家さんに聞いたら『離れ？ んにゃもん無いよ』って言うてました」

意外にこの子、頭がいいのかもしれない。そして、大家さんのモノマネが結構似てた。

「ってか、何でここに居るんだよ！ 何してんの！」

「いえ、お洋服返して貰って帰ったんですけどね。言い忘れた事があつたから、メールしようと思ったたらトモさんのメアド知らないし。っていうかトモさん携帯持ってないし。そして家の電話番号覚えてません。っていうか教えてもらってません！」

識乃ちゃんはイラついているのか、長文が続けば続くほど口調が速くなった。そして最後は、ほとんど怒鳴っているに等しかった。

「まあ、それはおいおい追って話しますよ！ それよりも」

そして、恐い陰相を一旦伏せる識乃ちゃん。そして上げられた彼女の顔は、さつきと打って変わって快活そのものであった。そんな彼女はこう言った。

「ご飯にしませんか？」

なんと、油の回ったような、鉄を焦がしたようなこの匂いの元は識乃ちゃんの作った料理だったようだ。

識乃ちゃんの作った料理は、奇想天外そのものだった。食べられそうなビジュアルが一つとしてないのだから、それはもう才能と言つて相違無いだろう。料理していると言うよりはむしろ、食材を無駄にする為の作業をしていると言つたほうが正しいようにさえ思えた。

——さて、どうしたものか。

食卓に出された食材の残骸を前に食べるかどうかを悩んでいる訳では無い。出された物体に対し、先述のような感想をそのまま口にしたところ、識乃ちゃんは号泣し、僕のベッドに潜り込んでしまったのだ。そのことについて悩んでいるのだ。

僕は立ち上がり、キッチンへと向かう。結局、識乃ちゃんはご飯を食べれば機嫌がよくなる。そう思つたのだ。

冷蔵庫の中を覗くと、……肉だけが綺麗に無くなっている。

——あの残骸は、鶏さんや豚さんのものでしたか。
すでに生ごみ用のゴミ箱に放り込まれた黒い物体に合掌してから、もう一度冷蔵庫へと向かう。

——えっと？ キヤベツ、ピーマン、萌やしに、おっ！ 無事であつたか、ひき肉さん！

更にキッチン下の収納からキムチ鍋の素を入手し、少し考えてから調理に移る。鍋は使わず、フライパンにキムチ鍋の素を入れて、水や片栗粉でねばりけを調整する。下処理を済ませたひき肉と野菜類をそこに投入し、餡と具材を絡める。オリジナル野菜炒めである最後に調味料で味を調え、大皿に盛ってから箸と共にテーブルまで運んだ。

テーブルの前には食べ物の匂いを嗅ぎ付けたのか、識乃ちゃんが座っていた、目に涙を溜めながら。

「はい、どうぞ。召し上がれ」

ため息混じりに声を掛けるといただきます、と小さく言ってから箸を手に取り、食べた。暫く食べてから識乃ちゃんはおいしいです、と言った。

「料理にはこういう応用力も必要だけど、まずは基本的な料理方法を学ばなきゃいけないんだよ？」

「分かります……けど。あんな言い方……しなくたって……良いじゃないですか」

箸が、口と野菜炒めの間を目まぐるしく往復し、その合間合間に識乃ちゃんは喋った。

「食べ物を食べながら、喋らないでくれる？」

「うっさいですね。良いじゃないですか、それぐらい」

軽く聞き流し、自分の箸を取りに行く僕。箸を入手し、テーブルに戻ると、野菜炒めは無くなっていた。

「はあ、ごちそうさまでしたっ」

飛びっきりの笑顔で合掌する彼女を咎めるのも何だか後ろめたくなり、僕は肩を落し、小さく呟くだけなのだった。

「お粗末さまです」

@x10 @@@

聞いてみると、識乃ちゃんが僕の家忍び込む事のできた理由はなんとも些細な事であった。彼女が家を訪ねてきた理由も実にしよもない物であった。

前者に関しては、ただの鍵の閉め忘れだった。なんだ、そんな事かと思われるかもしれないが、現に家の中に不審者が忍び込んでいたのだから、笑うに笑えない。

そして後者の理由。彼女が僕の家を訪れた理由、それは金銭関係

の相談の為であつた。

「なんだ、そんな事か」

「『なんだ、そんな事か』じゃ無いですよ！ 今日から私、この……助手？ になつたんですから、そこら辺はしっかりしませんと」
「何言つてんの？ 依頼料、つけてること忘れたの？」

減つた腹から気を逸らせるために体をベッドに放り投げ、淡々と、
だけれど冷たくはならないように識乃ちゃんへと返事を返した。

「違いますよ。知ってますか？ 私の家、これから電車で二十分掛
かるんですよ？ トモさん、お金持ちなんですから、それぐらいど
うにかありませんか？」

「じゃあ、僕の家に住む？」

完全無欠の冗談であつたのだが、何故だか識乃ちゃんは本気にし
てしまつたようだ。

「プ……プロポーズ……？」

「うん、断じて違う」

——何だよ、この茶番劇。

「でもでもマジですか！？ でもアレですよ？ 事務所もトモ
さんの家ですから、あっち私が使つても問題ないですよ。そつか
そつかあ、じゃあ、今度荷物持つてきますよ。……電気とか水道と
か、通つてましたっけ？ ああいや、でもそれは後からでも何とか
なりますよね」

「勝手に話を進めないでくれるかな？ ってか、そんなにお金無い
の？ そこまで言うなら通帳見てみたいな」

すると識乃ちゃんはいいいですよつと言つて、鞆の中から片手サイ
ズの書物を取り出した。

「持ち歩いてるんだ……」

「世の中物騒ですからね。というより、私の家警備スツカス力です
から」

何故か識乃ちゃんは胸を張つた。渡されたそれを開いてみると『
水曜日・晴れ、トモさんの助手になる。多町こうじんさんの家に行

く。変死体を見た後、寿司をたらふく食べる。』

などと書いてあった。実際には色ペンを使いまくって、ハートは何やらが書き込まれていたのだが、要約するとこんな感じであった。「これ、手帳なんだけど」

「えっ？ は、はあわわあああはわあわ！ 駄目です！ 返してください！」

『あたふた』を体で表現したような動きを見せた識乃ちゃんは、バツと僕の手の内から手帳を奪い去った。そして、それを鞆にしまい、代わりに同じ程の大きさの書物を取り出し、僕に差し出してきた。

「こつちです。こつちが本物です！」

「うん」

確かにそれは通帳であり、中を開いてみると吐き気がした。

「よ、四桁……？」

「そうですか？」

「『そうですか？』じゃないよ。なんか、二桁とかだともうなんか笑えてくるけど、四桁って！ なにそのリアルな貧乏！」

僕は通帳を識乃ちゃんに投げ返した。そして、ベッドにぶっ倒れて、なんとか言葉を紡いだ。

「あ、そうだ。識乃ちゃん、クライアントの名前ぐらい漢字でけなきやだよ？」

「露骨に現実逃避しないでください！」

通帳を鞆に直しながら、識乃ちゃんは叫んだ。そして、落ち着いてから、識乃ちゃんが再び口を開いた。

「でも、『こうじん』ってどんな字書くんでしたっけ？」

「辞書引きなさい。そこにあるでしょ？」

識乃ちゃんが本の山へと近づき、漁りだした。

「どの辞書が良いんですか？」

「やっぱ、収録数は広辞苑が一番だけど、僕的には広辞林が好きかな。例文が面白いし、文法的に読みやすいからね」

識乃ちゃんはへうつと気の無い返事をするだけで、その手にはすでに広辞苑が握られていた。

「あからさまに興味が無いのはさすがの僕も傷つくよ?」

「……」

完全に僕を無視して、ページを捲る識乃ちゃんは暫くそうした行為を続けた後、わあ、と声を上げた。

「『こうじん』って項目がいっぱいですっ! どれが多町さんのか分かりませんよ?」

「ああ、そういえばそうだね。ちよつと見せて」

僕は立ち上がり、識乃ちゃんの横から広辞苑を覗き込んだ。見てみれば『こうじん』という単語が二十一項目もあった。

【後塵】人や馬車の走ったあとにたつ塵。

【幸甚】何よりもしあわせ。

【黄塵】黄色のつちけむり。

【巷塵】俗世の汚れ。俗塵。

【荒神】三宝荒神の略。竈の神。

などなど。

「これだよ」

と、親切に指を差して教えてあげてからベッドに戻る。

そして、腰を下ろしたところで識乃ちゃんが話し出した。

「そう言えば、今日の昼三時頃に多町さんを見かけましたよ。こっちに来る途中」

「へえ、どこで?」

識乃ちゃんは手帳を取り出し、多町さんの名前を書き直しているようだ。

「商店街です。なんか、携帯を耳にあてて実に嫌そうな顔しながら二十秒ほどで切ってました」

「……多分、その電話相手、僕だ」

「へえ、そうなんですか。嫌われてるんですか?」

そこであることに気付き、体を起こした。

僕がガバツと体を起こしたのを見て、識乃ちゃんがビクンとろたえる。

「びっくりしました！ どうしたんですか？ トモさん。気でもおかしくなりましたか？」

「ちよつとテンション上がってきたよ。識乃ちゃん、ちよつと黙ってて」

立ち上がり、電話の前まで足を動かして、メモ用紙を一枚千切り、そこにボールペンで文字の羅列を書き連ねる。

.....。

二十分程ペンの走る音だけが部屋の中に流れ、その後に僕が『閃いた！』と声を上げるのを想像してくれた人も居るのかも知れないが、そんな事には成らなかった。

横で識乃ちゃんが五月蠅いからだ。二十分間、絶え間無く話しかけてくる。

「どうしたんですか？」「見せてください」「多町さんの件ですか？」「なんで黙ってるんですか？」「トモさん、お腹減りました」

「まだ何か書いているんですか？」

と、まあ兎に角五月蠅かったのだ。

「ちよつと！ なんで、静かにできないの？」

「それでも抑えてる方なんですよ？ あの物騒な刃物にツツコまなかつただけ褒めて欲しいぐらいですよ！」

ホルスターごと部屋の隅に放置された例の物を指差しながら、識乃ちゃんは言った。

「今、聞いちゃったね」

「なら仕方ありません、説明してください」

何だ、その身勝手なルールは。

「はあ、アレは『対刀・ついで鋏はさみ剪刀』って言うんだ。知り合いのご老人

に刀鍛冶が居てね、特注で作ってもらった」

「ほう、高そうですね」

「まあね。それでさっき言ったのが鋏の状態での名前、分解したと

きはそれぞれ『カネハサ』と『マエガタナ』って言うんだ」

「……、なんか、アレですね。」

識乃ちゃんの口が《かつこつけ》と動いた。

「そうかな？ ……、そうかもね」

「なんで鉄なんですか？」

「カモフラージュだよ。よつと。ほら、こんなに刃渡りが長い刃物を持つてると、法律違反で捕まっちゃうからね」

ベッドから手を伸ばし、ホルスターから鉄剪刀だけを抜き取り、刃を識乃ちゃんに見せた。そして、分解して、マエガタナを識乃ちゃんに持たせてやった。

「これとそれに違いなんてありますか？ 見分けられませんか？」

「そっちの方が刀身が細いから、刺すことに特化してるんだよ。こっちは若干反ってるから斬るほうが向いている」

説明の後ちよつとの間、カネハサとマエガタナを交互に見やつていた識乃ちゃんだが、なるほどと適当に言いながらしだいに興味を無くしていった。そして投げやりにマエガタナを返してきた。

「あまり役に立たなさそうです。なんだか急激に興味を失いました」

「だろうね。僕ならともかく君には一生要らない物だろうね。というより、君には扱えないだろうね」

鉄剪刀をホルスターに直しながら、識乃ちゃんに声をあげた。

「それはそうと、さっき何を書いていたんですか？ 見せてください」

識乃ちゃんは僕がテーブルに投げ捨てたメモ用紙を手にとった。

そして眉間に皺を寄せて、むむむ？ と声を上げて思考していた。

「意味が分かりません。何ですか、この文字の羅列。ヤバイ小学生の書く落書きの方がまだ見やすいですよ。クスリ乱用者の筆記テストみたいですね」

「無駄にリアルな例えはやめてくれない？」

「どっちが？」

「両方」

「すみません」

……。と無言になる二人。そして暫くして、先に根負けしたのは僕であった。

「まあでも、大体分かったよ。もう大丈夫だ」

両手を広げて安心の笑みを識乃ちゃんに見せた。

「へ？ 何が分かったんですか？ 大丈夫？ え？ 何、気持ち悪い」

自分の両肩を掴んで、ブルブルツと震える識乃ちゃん。

「その反応は止めてくれ」

と、まあ。

誰が僕ら二人の会話を心待ちにしているのだろうか。いや、そんな人は殆ど皆無であろう。そういう変態は、猥也一人で十分である。僕と識乃ちゃんのラブコメ路線など、どうせデッドエンドしか待っていないだろう。

しかしまあ、真面目な話、もうそろそろ解決編に入るべき頃合であると思う。そろそろ、この登場人物が少な過ぎる事件に幕を下ろしてやるのではないか。

第四話というか、第二幕の展開（後書き）

作中にでてきたオリジナル野菜炒めですが、十中八九まずいです。作った事ないから分かりませんが、多分おいしくは無いと思います。適当な事言ってますみません。

あと、中二っぽい武器を登場させてしまって、申し訳ありません。

第五話というか、第二幕の千秋楽（前書き）

いや、謎解きパートなんですけど……。
会話ばっかで読みにくいかもしれません。
すみません、疲れました。．．．；
そして、終わらなかった（泣）

第五話というか、第二幕の千秋楽

@x10 @@@@

次の日。

木曜日。

自宅。何故か識乃ちゃんがまた僕のベッドを占領して寝てしまっていたので、またしても僕はフローリングの上で目を覚ました。そしてやけに明るい事に気付き時計に目をやると、彼は午前八時を指し示していた。

——おおおお、生まれて初めて寝坊したああ！

普段、朝五時には目が覚める僕にすれば、この時間に目覚める事は驚き以外の何物でもなかった。しかしまあ、場合が場合なのだろう、致し方ない。なにせ夜九時には就寝しなければならない僕を彼女は、識乃ちゃんは、日にちの境目まで寝かさなかったのだから。

——しかし、多町さんの朝も早いだろうから問題無いよね。

寝ている識乃ちゃんは起こさず、電話の前まで足を運ぶ。受話器を手に取り、記憶にある多町さんの電話番号を打ち込む。十桁の数字列を打ち終え、多町さんが受話器を取るまでの時間を無機質なコール音を聞きながら過ごす。

「はい、多町です」

「どうも。朝早くからすみません」

「ああ、先生！いえいえそんな。いつでも暇なわたくしですから」
下手に出ている割に、昨日の事に一切触れない多町さんを不審に思い、鎌を掛けてみる。

「時に多町さん、昨日電話したのに何故出てくれなかったんですか？」

「え！？ ああ、ええと。すみませんです、携帯の電源が切れてた

ものですから」

「……ははは、そうでしたか」

その後、多町さん宅に出向きたい旨を伝えた。わたくしが行かせてもらいますよ、と気を使った言葉を、寄り道したい所があるのでとかわし、半ば強引に通話を終わらせた。

さてと。

——識乃ちゃんを起こして、ネタを仕込んでおかないといけないね。

@ x 1 0 @ @ @ @ @

横を歩く識乃ちゃんは実に不機嫌であった。

なんでも、女の子は毎日着替えないと死んでしまう生き物らしい。

「違いますよ！ 着替えないといけないんじゃないんです！」

腕をブンブン振り回す識乃ちゃん。

「こんな皺のいった服を着てると、『あの子昨日お泊りだったんだぜ、きつと』って言われるんです！」

大声を上げる識乃ちゃん。ちなみに今日はわりと温かく、識乃ちゃんもダウンを羽織る必要が無かった。

それにしても、行き交う老若男女の視線を集めて、何がしたいのだろうか。

「その発言が、痛い視線を集めるんだよ」

すれ違う人々にすみません、と頭を下げながら、識乃ちゃんに声をかけた。

「ちよつと。どこかに寄って服買ってもらっていいですか？」

「語尾がおかしいから嫌だ。ほらそれより、今日の帰りもあの寿司屋寄ろうよ」

二車線の道路を挟んだ向こう側に例の寿司屋を見つけ、指差しながら提案する。

「珍しいですね。トモさんが私に貢ぎたいなんて」

「あそこはホントに美味しかったから、僕が個人的に行きたいんだよ」

会話が一旦そこで無くなり、百メートル程歩いたところにある信号で道路の反対側へと移った。

「なんで、今の横断歩道渡ったんですか？ まだ向こうの方まで行つてからでもよかったんじゃないですか？」

「ん？ ああ、言つてなかったっけ？ 要る物があるんだよ、すぐそこにね」

「それにしてもさっきの話、本当なんですか？ 余り信じられるものじゃないですよ？ なんて言うんですか、荒唐無稽？」

うーんと首を傾げる識乃ちゃんに苦言を呈する。

「『サケノバ』なんて宗教団体に入団してしまった君の台詞じゃないね？」

「サ、ケノ、バ？ なんですか、それ。美味しいんですか？」

——やばい、マジで殴りたい……っ！

「ほらこれ、これだよ。これが、必要なものなんだよ」

歩きながらベリツと対象物を剥がし、識乃ちゃんによく見えるように彼女の顔に近づける。

識乃ちゃんは顔を真っ赤にして叫んだ。

「不健全です、この変態！！」

@x10 @@@@

「さて、多町さん。今、十時半です。あなたも時間が無いでしょうから、今回はあまり出し惜しみなんて真似止めてくださいね？」

多町さんの家。例によってリビングで、例にもよって、前日と同じ位置に腰を下ろしていた。

「なんの事だか……良く分からないんですが。お話に来たんですよ？」

「いや、今日に限っては違います。」

不安げな表情をする多町さんに少し鋭い視線を浴びせる。

「二、三、聞いてもよろしいですか？ 多町さん」

「ええ、構いませんですが……」

やはり時間が気になるのだろう、多町さんは時折時計に目をやった。

「では。多町さん、あなたの血液型は？」

「Aですが」

前にも言いませんでしたか？ と多町さんは言った。

「詳しく」

「AとOとの形質を持ったA型です」

「ですよ」

大仰に頷いてみせてから、次の質問へと移った。

「今日の午後からは何を？」

「午後ですか？ ですから、仕事があるですと」

「成程。ではこの家は留守になるんですね？」

ええ、と多町さんは頷いた。

「では、最後に」

「はい、なんででしょう？」

たつぷりと間を空けてから、気管内の空気を全て吐き出すように言った。

「ルームシェアをしている、いわゆる同居人の名前をお聞かせください」

「……っ！」

予想通り、多町さんは言葉に詰まった。

「そ、そんな、個人情報ですから」

——ま、そう来ますよね。

「そうですね、そうですね。ではちょっと僕の余談を聞いてくだ

さい」

「……？ 手短にお願いしますですよ？」

任せてください、と答えてから話を切り出す。

「生物の形質の話になりますが、A型形質とB型形質はO型形質に比べて優性ですよ」

「存じ上げていますです」

そうですか、そう答えて続ける。

「そして劣性であるO型形質は優性形質に負け、表に出ない。基本的に」

「わたくしの中の劣性形質の話をしているのですか？」

「まあ……、そうですね。あなた、小さい頃、虐められたとか」

多町さんは顔を伏せて、思い出たくありません。そう言った。

「先生！ 何が言いたいのかわかりませんです！ なんなんですか、この拷問のようなやり取りは！」

「ああ、すみません。そんなつもりじゃ無かったんです」

実際そんなつもりは無かった。拷問なんて汚いやり方は嫌いなものだから。

「ですが、虐められた多町さんがショックからO型形質を表に出して、もう一つの人格の中に隠れたというのなら納得できませんか？
更に、同居人など初めから存在せず、その同居人をもう一つの人格の事だとして話していたのだとしたら、素敵だと思いませんか？」
拷問は嫌いでも、誘導尋問はあながち嫌いでもなかった。

「……」

多町さんは暫く黙っていたが、急に笑い出した。

「ぶはははは。先生、わたくしが二重人格だって言いたいんですか？」

「言いたいんじゃない。あなたは二重人格そのものだ」

「そんなご都合主義認められませんですよ？」

多町さんは絶えず笑っていた。

「ご都合主義？ 何を言ってるんですか、あなたは。ここまで来る

のにどれだけのヒントがあつたか。僕らの行動の全てが伏線だつたといつても言い。そうじゃない部分と言えば、寿司屋の件だけぐらいですよ。ねえ、識乃ちゃん」

横の識乃ちゃんに話を振つたのに、一切返事が返つてこないことを不審に思い、識乃ちゃんを見やると。眠っていた。

僕は多町さんに向かって肩を竦めた。

多町さんは軽く笑っていたが、顔に余裕は無かつた。

多町さん、と本題に戻す。

「『パラドックス』と言う物を知っていますか？」

「ええ、仮定と結論の逆転つて意味ですよ、確か。逆説とかです」

「厳密には違いますが、まあそこまで把握していただけているのなら十分でしょう」

例えば。

「例えば、『幸甚』なんて名前を付けられたら、その子、どうすると思います？」

多町さんは少しの間黙り込んだあと、静かに答えた。

「名前負けせぬよう、頑張つて幸せを尽くしますですよ」

過去の思い出を語るような口調で多町さんは言った。

「……そうですね。それなのに、その名前が原因で虐められでもしたらどうなるんでしょうね？」

「絶望の淵に立たされる気分でしたよ」

そしてわたくしは、自ら底に飛び降りましたですよ。

そう答えた。

「多町さん。その崖の底には一体何があつたのですか？教えてください、ソコに飛び込んで行ったあなたを何が待っていたんですか？」

たつぷりと十分すぎるほどの間を持って、多町さんは消え入るような声を搾り出した。

「『逃げ』だつたんでしょね」

答えた多町さんの瞳は涙で濡れていた。

@x10 @@@@

「自分が、もう一人の自分が人殺しをした。そう分かっていたんじゃないですか？」

多町さんの落ち着きを待ってから、できるだけこやかに声を掛けた。

「知っている事全部言ってくれないと、カウンセリングにならないじゃないですか」

多町さんも幾分かすつきりしたような顔つきだった。

「すみませんです。わたくしの方からは彼の意識を読めないみたいなのです」

識乃ちゃんはいつの間にか目覚めており、お茶を「熱い熱い」言いながら啜っていた。

「成程、それは興味深いですね。そのもう一人の名前はなんと言うのですか？」

大方、『巷塵^{コウジン}』とかじゃないですか？ そう言った。

「何故、知っているんですか!？」

多町さんは本当に驚いた様子だった。

「だからパラドックスですよ。あなたのその名前も、別人格を創る、一つの要素だったんですよ」

「ほう。自分のことながら、感心するような納得するような変な気分になるです」

気まずそうに微笑む多町さんは肩の荷を下ろした様に落ち着いていた。

——いや、良かった。

本当に。良かった。

これでこの話の終盤を迎える事ができる。

「昨日電話した時、実は多町さん、電話に出たんですよ？」

「へ？」

その事実では無く、話自体が解からないといった様子であった。

「ああ、今朝の電話の件ですか」

感慨深しげにそうだんだんですか、と多町さんは言った。

「しかし何ですか、毎日、夜になったら記憶を失うような事例が過去にあったように巷塵さんが現れる時間も決まっているんですか？」

「その通りです。彼は、というかわたくしなのですが、ちょうどお昼時になると交替してしまふんです。そしてその十二時間後に再び交替って感じなのです」

なるほど。

予想通りだ。

「では多町さん、差し当たっては遺体の話に話題を持っていきたいのですが」

「お願いします」

多町さんのさほど興味も無いような表情が印象的であった。

肩の荷が下りて、実際どうでもよくなったのかも知れない。

@x10 @@@@ @@@@

十一時十五分。

——ちよつと早すぎたかな。もう少し、ギリギリでも良いんだけど。部屋の時計を確認して、不意にそんな事を思った。

「トモさん？ どうしたんです？」

僕を『トモさん』などと呼んでくれるのは、識乃ちゃんだけである。

多町さんが再びダンボールを取り出し、それを囲むように三人で中身を覗いていた。

「ああ、いや。そうだ、ちょっと時間あるし、軽口叩こうか識乃ちゃん」

「いやです」

「そう……」

あまりに早い即答に若干のショックを受けつつ、それでも諦めたくない僕は多町さんへ話を振った。

「多町さん、『月見里獏也』って知ってますか？」

「ああ、知ってますですよ？ ああ、一昨日ぐらいに死刑が執行されたって言う」

——やっぱり有名人だな、あいつは。

当たり前の事なのだが、自分の親友が世に知れていると言うのはなんだか変な気分だった。

「そう。その彼なんですけど、実は僕のもとだ……、ちょっと待って下さい、多町さん。識乃ちゃん、勝手に触らないでくれるかな！」

多町さんに許可を得た上で、ダンボールの中身をプニプニと触る識乃ちゃんに一喝を入れた。

「ひっ！ す、すみません。だって、これ人間にしか見えなかったから」

「もう、識乃ちゃん、呼ぶべきところでちゃんと呼ぶから、座ってていいよ。んで、黙っというて」

わかりました、と言ってからソファに戻る識乃ちゃんを見届けて、多町さんへと顔の方向を戻した。

「すみませんね、うちのが」

「いえいえです。月見里さんがあなたのお友達と言う所までは聞きましたよ？」

「ああ、ありがとうございます。そう！ 彼にですね、昨日会ったんですよ」

多町さんはあからさまに驚いていた。それはそうだろう、一昨日殺されたと言う男に昨日会ったと言うのだから、驚かないなんて方がおかしいのだ。

「すみません、言っている意味が分からないんですが」

「まあ、僕も多少は驚きましたよ。彼の事を考えているところでちようど現れたもんですから。『噂をすれば影』なんて言いますが、あれは言いえて妙ですね」

.....

多町さんに変な目で見つめられた。視線を逃れるように識乃ちゃんに目をやると識乃ちゃんは、可哀想な子供を見るような目で僕を見つめていた。

暫くその状態が続き、時計を見るとそろそろ三十分になろうと言う時刻だったので、識乃ちゃんをこちらに寄せて、本題を繰り出した。

@ x 1 0 @ @ @ @ @ @ @ @ @

「さて。まず一番初めに、これ遺体でなければ死体でも無いです」
「へっ!？」

女性を指差しながら言った僕の言葉に、多町さんは気の抜けた声を上げた。

「ていうか、人間じゃないですよ? これ」

「どういう事ですか!？」

「こういう事です」

昨日識乃ちゃんが嫌がり、今朝僕が剥ぎ取った、一枚のチラシを多町さんに見せた。

『体で愛を売ります。ラブドール輸送販売承ります。 x x x - 〇

〇〇〇 - 』

「からだを.....愛で? 売ります?」

「そっちじゃないです、多町さん。ラブドールの輸送販売の方です」
「ラブドール？」

識乃ちゃん、説明してあげて？ と識乃ちゃんに振ったら、脛にローキックを喰らわされた

「っ痛」。まあ、あれですよ。俗に言う『大人の玩具』ってやつですよ。昔は『ダッチ・ワイフ』なんて言ってたみたいですけどね」

多町さんは一瞬たじろいだが、そうなんですか、と言った。

「きつと、巷塵さんが買ったんじゃないですか？」

「ですが、何故開けても無いのに分かるんですか？」

「そう仮説を立てると全てに辻褄が合うからですよ」
そう。

全てに辻褄が合う。

化粧品メーカー名義になっていたのは、そういう類の店では当たり前なほどにありきたりなサービスだったはずだ。

顔が上を向いていたのも、商品の容姿を開封前から確認できるようにだろう。

妙な重さも、シリコン樹脂のものだと考えれば納得がいく。

人間そっくりな弾力も、また然り。

全てを逐一説明し、説明し尽くしたところで多町さんは言った。

「つまり、そういう事ですか」

「そういうことです。時に多町さん、もう一体の人形は？」

「実はまだ、開けてないんですよ」

多町さんは言った。その表情は恥ずかしがっているようにも、ホッと安心しているようでもあった。

たったそれだけの事だった。怪しがっていた、もう一つのダンボール。ただ、開けていないだけなのだと。たったそれだけのことだった。

「しかし、やっぱり人間にしか見えませんね」

横では、識乃ちゃんがまた人形をプニプニと触っていた。その姿は少し妖艶に見えた。

しかし、説明に少し時間が掛かった。時計を見ると十二時になりかけていた。

——ぴったりだな。

そして多町さんは、おもむろに床へと倒れた。

@x20

立ち上がった多町さんの目は虚ろで、それこそ人形のようなだった。
「巷塵さん、ですよね？」

僕は問うた。識乃ちゃんは、僕の後ろへと体を隠すように下がった。

「お前は、本当に。なんでもお見通しなのか」

言葉からは苛立ちが見て取れた。

「やはり、あなたからはもう一人の心が読めるようですね」

「よくある話だろ？」

——確かに。確かによく聞く。

だが、よく聞く話だからと言ってよくある話だとは限らない。

「死刑が執行された人間だって生きている事があるんですから」

「あ？ 何言ってやがんだ？」

攻撃するつもりは無いようだったので、衣服の下の鋏剪刀に置いていた手を離れた。

「ですが、あのもう一つのダンボールにおいて、たったそれだけという事は無いですよね？」

含み笑いを兼ねた声で多町さん、いや巷塵さんに話しかけた。

「ふっ、何の事だ？」

厭らしい笑顔を見せる巷塵さんに識乃ちゃんはより僕の擦り寄った。

——おお、なんか女の子にこうやって甘えられると、少し優越感に

浸れるな。

しかし、この人やりにくいな。

「僕は、田町さんには甘く言いましたが、実際そんな事を思っているわけじゃありません」

「俺も多町なんだけど、まあいいや。しかしどういうことだ？」

単刀直入に言わせてもらいますよ？ と前置きして、言った。

「あなた、人を殺してますよね？」

俺は誠実な人間なのだから人殺しなどしてないが？ などと巷塵さんはにやけながら大法螺を吹いた。

第五話というか、第二幕の千秋楽（後書き）

もう少し、多町さんの話が続きそうです。すみません。・・・

第六話というか、第二幕の終演（前書き）

なんだかあっさり終わっちゃいました。

あっさりってかちゃっかりって感じですか？ まあとっちでもいい

ですけど^^

とにかく。

多町さんが可哀想で仕方ない^^；

第六話というか、第二幕の終演

@ x 2 0 @

少し衝撃的かもしれないが、自宅。時計の針は午後二時を指し示していた。

「しかし、どうなっちゃうんですか？ 多町さん」

識乃ちゃんが、彼女にしては珍しく神妙な顔つきで聞いてきた。

今現在、向かい合って座っているの、彼女の顔色がよく窺えた。「あれはねえ、多町さんには申し訳ないけど、仕方ない程に致し方ない結果なんだと思うよ」

「でも、人殺しをしたのは悪多町さんであって、多町さんじゃ無いじゃないですか？」

識乃ちゃん、その呼び方こんがらがっちゃうよ。と、僕は軽口を叩いた。

「でも、彼を作り出したのが多町さんだと考えれば、多町さんに責任が一切無いとも言えないんじゃないかな」

「でもそれはいじめら……」

識乃ちゃんは言葉に詰まり、苦そうな顔をした。

「心に付け入るスキがあるのがだめだった、と思うよ、僕は。たとえばそれがどんな状況であつたとしてもね」

識乃ちゃんはあからさまに不機嫌になった。何というかブスウとなつた。そして一言こう言つた。

「そんなもんなんですかね？」

僕は間髪いれずにこう答えた。

「案外、そんなもんなんだよ」

以下回想。

「あなたは人を殺してますね？」

「俺は誠実な男なのだから人殺しなどしないが？」

巷塵さんはにやけながらそんな法螺を吹いた。

「大方、もう一つのダンボールには本物の死体が入っているんじゃないですか？ ラブドールの方はカモフラージュと言った所ですか？」
「だったらどうだって言うんだ？ 知つての通り、この体は俺だけのものじゃない。というより俺のものじゃない。俺の殺人が世に知れて捕まるのは、本体であるあいつなんだぞ？ お前にはどうする事もできない。そうだろ？」

——確かに、その通りだ。けど、どうする事もできない事は無い。

「警察に通報します。事実に基づき、ここで見たこと聞いたこと、更には知った事や勘付いたこと全てを洗いざらい話します」

まあ、僕らに都合の悪いところは誤魔化しますが。そう言って、軽く笑った。

「ト、トモさん！？ 本気ですか！ そんなことしたら多町さんが……」

意外にも反論したのは、識乃ちゃんだった。

それはもう意外だった。

「識乃ちゃん？ なんでそんな事言うの？」

「なんでって……」

——なんで識乃ちゃん、そんな悲しそうな顔をするんだろう。ホントに分からない。

識乃ちゃんが困ったような顔をするので、僕も少し悲しくなった。
「いやだって、殺人者なんだよ？ 反省しているなら兎も角、彼にそんな様子垣間見れないじゃない？」

「だから、それはこの人であって、多町さんじゃないんですって」

自分の話なのに置いてけぼりを喰らって、多町さんは困惑していた。

しかし無視して、僕は識乃ちゃんに答える。

「そうかも知れないけど、そうじゃないかも知れないよ？ それを決めるのは警察官の仕事なんだよ」

僕は、識乃ちゃんに携帯を借りて、迷わず百十番を入力した。そして笑って言った。

「やっぱり、携帯って良い物かもね」

@ x 2 0 @ @ @

回想終了。

結局、もう一つのダンボールの中に何が、いや、誰が入っていたのかは分からなかった。見ようとも思わなかったし、警察とのやり取りの前に自宅に戻っておきたかった。識乃ちゃんとの口裏合わせのために。

しかし思えば、家電量販店でテレビを見ていた時、心なしか、行方不明の人間が報道されていないか。そんな事を考えていたようだ。しかしそんなニュースは一切無かった。あの焦燥感はそのところから来ていたのかもしれない。

しかし、被害届も出されないような人間だという事が分かって僕は安心した。そんな人間なら、生きている周りの人間が悲しむ事もないのだから。

考察終了。

閑話休題。

識乃ちゃんはふてくされて、僕のベッドに体を委ねた。そして持ち帰った『智子^{トモコ}』さんに話しかけた。

「あの人、冷たいですね、智子さん？」

あの人は僕の事であろう。

「その名前はとうにかならないの？ てかなんで持って帰ってきちゃったの、んな重い物」

帰り道は何となく気まずくて、彼女と一切の言葉を交わしていなかった。何故気まずい空気にならなくてはいけなかったのか、よく分からなかったが。まあしかし、彼女にツツコミを入れられる空気でもなかったのだ。

兎に角。

識乃ちゃんは、あのダンボールにキヤスターを取り付けて（縄で括り付けるタイプ）、ラブドールを家にまで連れてきてしまったのだ。そして僕の家に着くなり袋を破り、智子さんを誕生させた。服はダンボールの底に備え付けとして入れられていた。

「良いじゃないですか、別に。だって何だか可哀想だったんですもん。大丈夫です、私の住む事務所の方に置いときますから」

「後で、警察から色々聞かれるきっかけになるんだよ、そういうの。まあ、多町さん宅に出入りするところ、見られてるだろうからおなじだろうけど。全く多町さんは、捕まった後も僕らに迷惑かけるんだね。はあ。……、あと事務所にその子を置いとくとクライアントが驚くから止めてね」

寝転んだ識乃ちゃんの表情は分からなかったが、何だか怒りの才——ラが見えた気がした。

「トモさん昔、友達と呼べる人が居ましたか？」

「うん、まあ。人並みには居た気がするけど」

「トモさんを憎んでいた人は？」

「そりゃ、生きていればそういう人もできるでしょ？ そう答えた。どっちの方が多かったですか？」

「後者」

——確立の問題で考えれば、どう考えても後者の方が多くなるのは悲しいほど当たり前の事だと思うけれど。

そう思っただけで答えたのだが、識乃ちゃんの答えは僕の予想を裏切っ

た。

「普通自分が嫌われているなんて、意識しなくて解かるものじゃないんですよ。もし意識していたとしても、そんな答えがすらすら口をついて出てくるなんてのは異常なことなんです」

識乃ちゃんの声色は怒りと哀れみが入り混じっていたように思えた。

「トモさん、あなたはそれがどんなに辛い選択であつたとしても、それが最善であると判断したら、何の迷いも無くそれを実行するでしょう？」

「そりゃあ、それが最善なんですよ？」

たとえば。

たとえば、と識乃ちゃんは言った。

「たとえば。私と自分、どちらかを殺さなければならぬ場合どうします？」

「君を殺して、自首するよ」

即答したのがいけなかったのだろうか？ 識乃ちゃんは無言になつてしまった。答えた僕がここで発言するのも不自然に思え、僕もまた無言になつた。

……………。

暫くして、識乃ちゃんが上半身を起こし、僕の瞳をしっかりと見つめて口を開いた。僕はホツとした。

「世離れ」

——ん？

「トモさん以前『僕よく世離れしてるって言われるんだよね』って言つてましたけど。それは、別にテレビや新聞を確認してないからではないんじゃないかと、そう思いました。たつた今」

「何の話？」

僕は若干勘付いてはいたが、少し認めなくなかつたのかも知れない。

「今までトモさんの言動で『アレ？』と思うところは多々ありまし

た。でも今のやり取りで確信しました」

何を？ 僕はそんなことを口にした。

しかし、識乃ちゃんのはつきりと言った。

やはり、識乃ちゃんはしっかりと言った。

「あなたはサヴァン症候群の代償として感情を欠落しているんじゃないですか？」

そんなこと、

そんなこと。

鋭い直球のような識乃ちゃんの言葉に。

僕は。

「そんなことないよ」

そう答えて、はははっ、と笑うことしかできなかった。

第六話というか、第二幕の終演（後書き）

いつもコメントを下さる方、本当にありがとうございます^^

あえて個人名は言いませんが、秋山悠真さんには本当に感謝の気持ちでいっぱいです^^

数少ないお気に入り登録してくださっている方々、できれば。よろしければ。

これからもよろしくおねがいします!!

第七話というか、第二幕の余韻……というか、ほんの余興（前書き）

いやさ、筆が進む進む^^

こっぴうのは書ける時に一気に書いた方が良いでしょうね。

今回は少し短めに、見えて恥ずかしくなるような内容になっておりますが、結構重要な場面のようにも思えます。

どうか、最後まで読んでくださるよう、お願いします！

第七話というか、第二幕の余韻……というか、ほんの余興

&

冬はどうしてこんなに寒いのだろうか。そしてどうしてこんなに面倒くさいのだろうか。

その旨をそのまま識乃ちゃんに伝えたら、こんな事を言われた。

「この寒さは神様がくれたご褒美なんですよっ！ 面倒だなんて言わず、素直に楽しみましょうよ」

「だから、素直になると面倒なんだって。てか、識乃ちゃん近い」
何でも、世の人々はこの寒さを口実に異性と接近するそうだ。例を挙げると、「寒いから手繋ごっか」と、こういう事らしい。

そしてそれに従い、識乃ちゃんは僕に接近した。繋いでいるのは手では無く、腕なのだが。

「あと、冬だから。ではないですよ。今日はクリスマスじゃないですよか！」

「クリスマスに腕を組んで、人通りの多いこの大通りを歩かなくちゃいけない理由を十文字以内で述べよ」

ほんのいたずら心で言った言葉に、識乃ちゃんは本気で困惑したようだ。ムムムと額に皺を寄せて、少し顔を赤く染めた。寒さで元々赤かった顔が赤くなっただのが分かったのだから、実際には相当赤面していることだろう。

そして、投げやりな風に言った。

「トモさんが好きだから」

見事に十文字きっかりだった。

&&

多町さん事件のすぐ後。僕が識乃ちゃんにコテンパンにされた後。識乃ちゃんは僕に言った。

『完璧な人間など居ません。トモさんの、その欠落部分もトモさん自身なのです』

と。

力強く、繊細に、消え入りそうな怒号で。とびっきりの笑顔で涙を流しながら。

そして、こう続けた。

『私は、トモさんのその足りない部分だって愛せます！ 欠落した存在しないその空虚を受け止められます』

僕は沈黙を厳守する事しか出来なかった。否定の言葉も拒否の感情も表現することが出来なかった。あるいは、そんな感情、もともと持ち合わせていなかったのかも知れない。

最後に識乃ちゃんはこう付け加えた。

『トモさん。私、トモさんが好きです。私達はこれから付き合います！』

と。

答えに拒否権を与えないあたり、彼女らしい。しかし識乃ちゃんはその後、すぐさま玄関を飛び出て行ってしまった。

もれなく恋人同士になってしまった僕と識乃ちゃんは、周りから見ても円満に映っていたのではないだろうか。識乃ちゃんは、自分の家の契約を取っ払い、本当に事務所に荷物を持ってきてしまった。全く知らなかった事だが、識乃ちゃんは四輪の普通免許を持っていたらしく知人に車を借りて荷物を僕の家まで運んできた。

「その行動力を就職活動に活かせなかったの？」と呆れ気味に言ってみたものの、「今はトモさんと一緒に居られると思うから頑張れ

るんですよ」と、挨拶に困る返事しかもらえなかった。

&&&

いきなり十二月下旬にまで時は進み今現在に到るのであるが、ここ一ヶ月の僕らにはたいした事も起こっておらず、僕と識乃ちゃんの日常など語るに値しないだろう。何故なら、八割方が惚気になっってしまう気がするからである。残りの二割は多町さんの件での口裏合わせである。

それにしても。

情緒の足りない僕を好いてくれるなど、彼女はとんだ変人であると思う。まあ、恋人とはそんなものなのだろうが。しかし、結局はこれも惚気になるのだろう。

過去に、こういう会話を実に不愉快だと思っていた気がするが、まあ、仕方のないことであろう。僕らを芳しく思わない読者諸君。君たちも恋人というものを作ってみるといい。

楽しい。

そう、楽しいのだ。

そんな感情を持ち合わせているのかどうかも怪しい僕でさえ、幸せを感じている。こんな僕でも、彼女の愛を真摯に受け止める事ができるのである。

しかし何だろう。僕が識乃ちゃんに持っている感情は、愛ではない気がする。『愛する』がどんな感情なのか分からない訳ではないが、これがそれに当てはまるのかどうかは分からない。

まあ。

まあ、楽しいんだから。

楽しいんだから、そんなことどうでもいいのだ。

&&&&

所は移り、大通りがよく見渡せる喫茶店内。識乃ちゃんはテラスが良いと言ったのだが、そんなの自ら風邪を引きに行くようなものだと言断固拒否した。それでも窓際のテーブル席を確保する事にした。たった二人でテーブル席を取るなんて、というような視線をいくつも浴びたが、識乃ちゃんは、そんなものを気にするほど小さい魂を持っていなかったらしい。勿論、僕は気にした。

時間は、夜の七時四十分。

普段この店は、七時には閉まってしまうのだが、今日はクリスマスナイトキャンペーンだとかなんとか。

——本当に日本人は自由だなあ。

宗教無視の日本人に向けた思いも、識乃ちゃんの言葉で遮られた。「トモさん？ さっきから何黙りこけてんですか」

「ああ、ごめん。……多分それ、『黙りこくってんですか』の間違いじゃない？」

実際にどうでもいい返事をしたのがいけなかったようだ。実際にどうでもいいです！ と、強く言われてしまった。

白けた空気が流れる中、モノクロの制服を着たメイドのようなウエイトレスがやって来て、注文をとった。ホットコーヒー二杯に抹茶パフェ二個という、当たり障りのないメニューでミスマツチするという、変わった芸にウエイトレスは少し戸惑い、注文の確認の際に軽く噛んだ。

去っていくウエイトレスの後姿を何気なしに見つめていたら、識乃ちゃんがつまらなそうな顔でぼやいた。

「何を見てるんですか、涎垂らして」

「いや？ 別に。ってか、垂らしてない！」

——前にもこんなやり取りを……、まっいつか。

実に典型的なデジャビュのノリであった。

「何ですか？ トモさん、まさかのメイド萌えですか！？」

何故か大声を発する識乃ちゃん。

「違うよ。まあ、識乃ちゃんが着たいってんなら是非も無いけれど」

「……いいですよ？ そこまで言うなら」

さつきとは相対的に小さい声で言う識乃ちゃんは、少し恥ずかしそうに顔を伏せた。

「寒い」

僕は何となく寒くて呟いたのだが、少し勘違いされてしまったようだ。

「何が寒いですか！ トモさんが着て欲しいって言うから、それならいいですよ、って言っただけなのに！ 人の思いを無下にしないで最低です！」

識乃ちゃんの顔は絶えず、赤いままであった。そういう意味じゃなくて、と訂正すると、やっと識乃ちゃんの顔色が元に戻った。

「それは、寒いと言うから寒く感じるんですよ。『プラーシーボ効果』ってやつですよっ！」

「おっ、難しい言葉知ってるね。じゃあ、『寒い』の対義語は？」

「『暑い』です」

「じゃあ、『あつい』の対義語を『寒い』意外で二つ言ってみて」

「へ？……」

「……」

クリスマスで混んでいるからであろう、注文した物が来るのが遅い。その間、僕らはくだらない事をずっと話し続けていた。

僕も、識乃ちゃんもずっと笑顔だった。

&&&&&

僕らが店を出た後、『見るからに』と言う様な人物数人に取り囲まれたのを鋏剪刀で撃退したり、識乃ちゃんの家と呼ばれたので行ってみたら不細工なキーキが登場してきたり、クリスマスプレゼントと言って、どこで買ってきたのであるうか、ミニスカサントに扮装した識乃ちゃんと智子さんに絡まれたりと。

まあ色々あったのだが、どれもまた別の話である。それぞれで想像してくれる程度で十分すぎるほどに充分だ。

この後すぐに新しいレギュラーとして、月見里獏也が登場してくるのであるが、これがまた面倒くさい事案になるのだ。彼との一件がカウンセラーの守備範囲なのか、探偵のストライクゾーンなのか判断するのも難しい。多分どちらでも無いのだろう。

だが。

しかし。

だがしかし、それもまた今語る物語ではないと思う。

でも、僕としては。

しょうがないほどしょうもない、そんな生ぬるい物語がいつまでも続けばいいと思う。

いつまでも続いてくれと、心の底から懇願する。

第一話というか、第三戦の整列、礼

@

僕は自分の感情が他人よりも足りない事を、少年期に気付いた。
いや。

思い知った。

幼稚園児の頃。

僕は砂場を使いたくて、そこを独占していた幼児を殴った。すると先生が困惑の表情をつくり、父は僕をがなりたてた。そして、殴られた子は泣いていた。僕には、先生の困惑の理由も父の怒りの理由も相手の涙の理由も理解できなかった。それでも父の反応が一番僕を揺さぶった。嫌だった。これが『嫌』という感情なのかと納得もした。

だからだろうか。

父親を殺すのが最善の選択だと思ってしまったのは。
それがいけない事だとは分かっていた。それでも世の中の決まりなどより、自身の悦楽の方が僕にとっては優先だった。あの時僕が自首しなかったのは、単に『自首』という単語を知らなかったからだろう。そんなに楽な選択肢があるのだと知っていれば、幼いながらに証拠隠滅などしなかっただろうに。もつとも、当時は『証拠隠滅』という単語も知らなかったのだから、ただ「これが見つかる」とぼくは逮捕されてしまう」程度の考えしかなかったのだが。

小学生の頃。

自分の不自然に気付いた。徹底的に人付き合いを避け、クラスメイトや先生の動き、仕草、表情を見取り続けた。文字通り『見て、取った』。自分の足りない部分を他人のモノで補った。どのような場合にどう動けばいいか、天文学的確率の心境を全て暗記した。

それができるのが当たり前だと感じていた当時、他の皆も同じように感情を作り出しているのだと思っていた。

結果を言えば、僕は自分のサヴァンの症状を感知するよりも先に、自分の欠如部分を補ってしまったのだ。

それが間違いだった。それが僕の失敗だった。そのせいで。

中学校で僕が月見里獏也と出会ったあの時も、僕が母親に精神的に殺されたあの時も、上手くいかなかったのだ。上手に対処できなかったのだ。

サヴァンシンドローム。

幼稚園、小学校の頃の記憶を維持できているのだって、そのせいなのだ。

便利だと思っていた。

これで一人前の人間になれる、そう思った。

周りの人間と同じように性格が手に入る、そうとも思った。でも。

性格はできていても、人格はできていなかった。

人としてのキャラはできていたのに、人柄は完成していなかった。いや、もともとそんなもの無かった。

『なんだよ。柄にもない』

あんな簡単な、句読点を入れてもたった十文字の言葉に胸がよじれる思いをしたのも、自らの責任だったのだろう。

でも。

それでも。

奇しくも識乃ちゃんに貰った言葉と字数が重なってしまうのが、とても辛かった。

@@

——そろそろ、年越しだな。

十二月二十九日の今日、そんなことを思った。

月見里獏也が、笹本カウンセリング事務所を訪れたのには少し驚いた。しかし、識乃ちゃんが彼の顔にピンと来なかった事にはもっと驚いた。

「ちわっす」

獏也はそんな軽々しさで、いきなり事務所に入ってきた。

僕は普通に勤務していて、識乃ちゃんのせいで半減した仕事場で読書をしていた。本から静かに顔を上げ、獏也の顔を視認した。

「なんだ、獏也か」

そして、再び読書に戻った。

奥から、奥という程広くも無いが、まあ、奥から識乃ちゃんがやって来て、「お知り合いですか？」と言った。僕は読んでいた文庫本を床へと落とした。

「し、識乃ちゃん？ 本気で言ってるの？」

何がですか？ と、識乃ちゃんは本当によく分からないといった風に首を傾げた。その間にも獏也は堂々と事務所内に進入してきて、勝手にソファに深々と腰を下ろした。足を組むまではいかなかったものの、なかなか大きな態度である。なんだろう、獏也は珍しく物を携えているようだ。

鞆。

黒い皮製の鞆。何が入っているのかさっぱり分からないが、中身があまり詰まっていない事だけは見て取れる。というか、右手に鞆を握り締めていた。

「ようよう、お久じゃねえか。いつぶりだ？ 一ヶ月？ 二ヶ月？」

「うん、そうだね」

答になっていない僕の答えに何故か獏也は満足して、不意に右手の力を抜き、鞆を長い拘束から解いた。そして中からグシャグシャ

になった灰色の新聞紙を取り出した。それをおもむろに識乃ちゃんに渡し、こういう者です、と社会人らしく名乗った。

『月見里獏也死刑囚、前日午後五時前後に死刑が執行』

丁寧に、写真付きの記事であった。

——成程。日付が寿司屋に行ったあの日だ。

それを見て、識乃ちゃんが僕の見たかった反応をしてくれた。

「ん？　へ？　……………へえええええええ！？」

殺人者！　お化け！　幽霊！　と、色々と喚いた後に識乃ちゃんは僕の後ろに退散してきた。

「失礼だな、識乃ちゃん。こいつは僕の旧友の親友だよ」

僕の肩から顔だけ出して獏也を窺う識乃ちゃんに彼を紹介してあげる親切な僕を、獏也は変な目で見ていた。

「三度目の感動的な再会を期待してたのに、何？　お前、彼女なんかできてんの？」

「うーん、まあ」

僕の受け答えに識乃ちゃんは不服だった様だ。滅茶苦茶甲高い声を上げた。

「『うーん、まあ』？　なんですかそれ！　トモさんの旧友だか幽霊だか知りませんがね！　トモさんは私と愛し合っているんです！

この人はあげませんよ！」

獏也を指差し、叫ぶ識乃ちゃん。

——しかし、本気で言っているところが可愛いよな。

とか、そんな事を思った。

「…………いくら友でも、男の愛なんざ要らねえよ。君のなら全然貰ってあげてもいいけどな」

不敵で下品な笑い方をする獏也に、識乃ちゃんはまた体を僕に摺り寄せるのであった。

@@@

ここまで獺也が誰にも気付かれず来れたのには二つ程理由があったようだ。

無論、『誰にも』という言葉は比喻であって、気付いた人間が皆無と言うわけにはいかなかっただろうが。

まず一つ。

これは、識乃ちゃんが気付かなかった理由でもある。

人間の五感の内、一番ヒトが頼るものは間違いなく視覚であろう。だがしかし、人間の感覚器官で一番敏感な部分は『耳』なのだ。つまり聴覚がまず初めに印象を創るのだ。なんにしたって、視覚では零・一のタイムロスが生じる。それが頼れる訳が無い。アニメなんかのキャラの口の動きが適当でも、そのキャラクターが実際に喋っているように見えるのも、そのおかげなのである。

つまるところ。

とどのつまり。

誰も、月見里獺也の顔を覚えていなかった。

どこの誰も、彼を死刑囚だと認識していなかった。

たった、それだけの事だった。

二つ目の理由は、まあ、この本人の説明を聞こうではないか。

今は昔。ある人、月見里獺也なる人に死なざりける理由を問いただせば。

本人曰く。

「いやな、これ本当、マジな話なんだけど。日本ではな？ 死刑を執行すればそこで刑終了なんだよ」

「そりゃそうだろ。死刑でその人、死んじゃうんだから」

と申しければ、答えて曰く。

「ところがどっこい！俺、死ななかつたんだよね。呼吸不可能状態で気絶した俺を死んだと思い込んで警察の方々、下ろしちゃったんだよね。んで、死体の様に扱われていた俺は、担架の上で息を吹き返したって訳よ。ぎやはははは、マジウける」

とのたまいきる。

以上、家電量販店での会話。

まあ。

つまり。

死刑は執り行われたが、未練がましい獺也は死ななかつたという事だ。

「まあ、たかが死刑で死ぬような奴だとは思ってなかったけどね」

「おつ。信用されてんじゃん、俺」

家電量販店でも言った感想に、家電量販店でも言った答えを返してくる獺也の下卑助のようなにやけ顔は、昔のままでった。

あらゆる物語には『殺しても死なない』ようなキャラが多々登場するが、彼のようなケースは珍しいのではないかと思う。もっとも、こいつの場合、『死んでも、死にきれない』と表現する方が正しいように思えるが。

「時に友よ。しっかしお前が『恋人』だとか『愛』だとか、そういうモノを口にするとはな」

「うーん、まあ」

どこかで聞いたような返事で言葉を濁す僕を識乃ちゃんは睨んだ。ちなみに、今現在、僕と識乃ちゃんも獺也の向かいに座っている。そして識乃ちゃんは、その眉間に皺を寄せた怖い顔を獺也に向けた。「信じられませんね、そんな荒唐無稽な話。なら、何でテレビとかで報道されないんですか？」

識乃ちゃんはあくまで挑戦的な態度をとっていた。僕は識乃ちゃんの額に触り、皺を伸ばしてあげて、彼女の疑問を解消してあげた。「そんなの報道されるわけないでしょ？死刑囚が釈放されたなんて、社会が大混乱に陥るでしょ？」

そう。それが二つ目の理由。

国家側の隠蔽。

これこそ、たったそれだけの話だった。

「まあ？　これで俺も無罪放免つてわけだから。今後ともよろー」

――無罪放免ではないよ、それ。

口に出しても意味をなさなそうなツツコミを心の中で唱えつつ、

口では話の方向を変える為の単語を言った。

「それはそうと、なんで何しに来たの？」

「んあ？」

「こないだ家電屋で『きつとこれが最後の邂逅になるわ。んじゃあな』って、邂逅の使い方間違いながら言ってたじゃない。とびっきりの決め顔で」

「うっせ。ほっとけ」

獏也は苦そうな顔をした。横を見ると識乃ちゃんは隣で静かにしていた。彼女は僕との距離感を上手く掴むことに成功したようで、僕が第三者と話しているときは静かにしてくれるようになっていた。――僕の事をよく理解してるな。可愛い奴め。

自分でも少し馬鹿馬鹿しいと思ったが、周りからの見た目はそれ以上だったらしい。

「何をにやけてるんですか？」

「何、にやってんだよ」

「「気持ち悪い」」

さっきまであんなに険悪な雰囲気だった二人がハモった。僕に対する二人の感想が素敵なハーモニーを生んだのだ。これはもう、僕が二人を繋ぐ架け橋になったと言っても過言ではないだろう。

……いや、それは過言か。

「しっかしそうだな。……、『なんで』って言われたらこう答えるしかないわな。」

何故か一息ついて、獏也は言った。

「金が無い。家を閉め出された。住む場所も食う物も着る物も無い。どうか！ 助けてくれ」

.....。

何か大事な事を言うのかと思って、獺也の台詞の前後に一行空けてやった事を本気で後悔した。更に言えば、まともな返事を瞬時に言えない僕を情けなく思った。

「トモさんトモさん」

と、識乃ちゃんが獺也には届かなさそうな小さな声で、僕に耳打ちをした。黙って耳を近づけてあげると、続きを口にした。

「あの人、ホントに警官殺しの、狂気の殺人犯ですか？ 私には、ただの職の見つけられない残念な社会の敗北者にしか見えないのですが」

「僕にもそうにしか見えない」

冗談めかして答えてはみたものの、実際に七割ほど正解している気がする。

しかしその会話を獺也は全て聞こえていたようだ。

「『警官殺し』か。んなように呼ばれたこともあったなあ。んまあでも、それも昔の話だし、今は残念な社会のごみで間違いないな」
「開き直るな、というか、『ごみ』とまでは言っていない」

そう訂正してから、考察する。

——しかし、助けてくれとはどういう事なんだろう。普通に金をあげればいいのかな。いや、でも職が無いとなると急場しのぎにしかないか。ん？ こいつは何を求めているんだろう。

「結局、どうして欲しいの？」

「ここに住まわせてくれ」

「「は？」」

今度は僕と識乃ちゃんがハモった。そして、

——やっぱり、恋人同士のハーモニーはそんな所そこの輩には負ける気がしないな。

みたいな事を思った。

「いや、だめだ。働かざる者、食うべからず。礼儀のない者、居候になるべからず」

「そこのお嬢ちゃんだって、まともな収入があるわけじゃないんだろ？」

何を！？ と識乃ちゃんが漫画のような反応をしたのが少し面白かった。

「私はちゃんとアルバイトをして稼いでいます！ トモさんが居ますし。それに仕送りもありますから」

「識乃ちゃん、最後の要らなかったな」

僕は肩をすくめて、項垂れた。ちなみに彼女の最近、本当に働いている。以前までは携帯代に消えていつていた実家からの仕送りも、今では全てを貯金にまわす程の余裕があるぐらいにまでなっていた。なんとも立派な事ではないか。そのきっかけが僕との出会いなのだとすれば、こんなに誇らしい事はないだろう。

「俺も頑張って働くからさ」

「履歴書にどう書くんだよ。備考欄に『以前、死刑を執行された経験有り』みたいなことが書いてる履歴書で一次試験に合格するような会社を、少なくとも僕は知らないのだけれども」

「う……」

そこで助け舟を出したのは、意外にも識乃ちゃんであった。

「私、今までいろんなバイトやってきましたけど。学歴とか要らないバイト、幾つか知ってますよ？ 例えば……、中野土建有限会社とか、ほら、駅前にあるクレープ屋とか」

「識乃ちゃん、土建で働いた事あるの？」

「はい」

ん？ と言った顔で頷くあたり、何がおかしいのか分からないのだろう。そうだ、そんなに経験豊富ならば。

「識乃ちゃん、メイドカフェとかで働いた事ある？」

できるだけ軽く、冗談である事を前面に押し出した語り口調で問

うてみた。

「無いですけど」

「だよ。当たり前だよ、ははは」

——無かったのか……

何故か、かなり残念な気がした。

しかしそうか。軽いバイトならできなくも無いな。名前は何とか同姓同名でいけるとして、歩合制の土建とかなら相当な額を取れるんじゃないか。

「でも、なんでウチに住むんだよ」

「いいじゃないか、気にすんなって。迷惑かけねえからさ、良いだろ？」

パシンと掌と掌を合わせて、「一生のお願いだから」と言う猥雑の姿がとても懐かしかった。こいつなら信用できるな、と思えてしまった。そして、昔のように答えてやった。

「お前の人生、二百七十三回目だよ？」

第一話というか、第三戦の整列、礼（後書き）

読んでいただけたならば、できるだけ感想を残してくださるようお願いします！！

（心の叫び）

第二話というか、第三戦の一回表・零対零

@@@@

月見里獏也、二十五歳。身長百七十五、体重六十一キロでAB型の牡牛座。警官殺しの狂気の殺人鬼。僕とは中学・高校で同級生であった。彼は国立大学へ、僕は短大へと進学したために連絡を取り合わなくなったが、なんの運が転じたのか、今年の初めに再会。彼の類希なるその身体能力と運の良さは語るに尽きない。

@@@@@

二週間が過ぎた。

それはつまり、年の境を越えたことを意味し、前章に訂正点があることを暗喩しているのだが、まあいい。

師走から、睦月。

年が明けた気がしない。何故だろう。そんな事問わずとも知れている、この馬鹿みたいな忙しさが原因だ。もしも今日の僕が昔の僧であれば、十二月も一月も『師走』と名づけた事であろう。

思えば、年越し蕎麦も食べていないし、年賀状も出していない。ただ、五十二インチの大画面テレビを見て過ごした程度の思い出しかできていない。

でも、そうだ。

僕の家テレビが来たことは、少し報告すべき事かもしれない。何だかんだで、獏也のバイトは一日も掛からず見つかった。中野土建有限会社。一番初めに選んだ会社で雇われたのだから、やはり

彼の運の良さは尊敬に値する。獏也は識乃ちゃんに道案内をしてもらい、一応僕も付いて行ったのだが、要らぬ世話だったようだ。土建の社長が言うには、『識乃の紹介なら信用できるな。よし、採用！』だそうだ。このような力仕事は、世知辛いこの頃の世間でも人員不足が続いているらしく、履歴書も持っていない獏也をいとも簡単に雇ってしまった。まあ、その分獏也は働くだろうし、何の問題も無いと思う。

思うのだが。

それよりも、獏也と識乃ちゃんが仲良くなりすぎなのが心配だ。

無論。

略奪愛だとか、ドロドロのメロドラマ的展開を危惧しているのではない。例えるのなら、そう。悪戯好きなやんちゃな子供が、仲間を見つけた感じだ。お互いに悪知恵が働き、各々の作戦を協力して行うのだから、それが厄介でないわけが無い。猿知恵とどちらが鬱陶しいか、今度徹底的に調べてやろうと思う。

ここで、笹本宅にテレビがある理由に繋がるわけだ。

あの二人が勝手にテレビを購入してきたのだ、僕のカードを持ち出して。あの因縁の家電量販店で、一番高いテレビを買おうとしたそうだ。しかし一番高いテレビはなんと六十万するらしく、やむなく五十二インチのテレビに『売約済み』のシールを貼らせの言う。僕からすれば、ある日曜日にいきなりテレビが家に届いたのだから、笑うに笑えない。僕の二十一万七千八百に翼が生えて飛んでいったしまった事は勿論ながら言うまでもない。その金額でもなかなかに安いらしいが、僕にとってはそんなこと、一切関係ない。通帳に刻まれた数字が小さくなった、それだけで十分だった。

ああ、それだけではない。

携帯電話だ。

今流行のスマートフォンなる携帯電話を無理に買わされた。これに関しては僕の発言が原因に無っていないわけでもないので余り偉そうにはできないのだが、それを理由に黙っていると、それこそ二

人の思う壺になってしまいうようにどうにも立ち回りが不安定になる。更に僕が二人を責める事ができない理由がもう一つある。それはこのスマートフォンそのものである。こんな便利な物を渡され、虜にならない輩が居るのならそれこそ本物の馬鹿であろう。ありとあらゆる機能があり、今までわざわざ達さんに借りていたパソコンも不必要になった。パケット料金がある一定の金額で変わらないという、得なのか損なのかよく分からない契約を交わされ、いつでもどこでもネットサーフィンができるようになった。その携帯電話に關しては、一応僕が選んだ事もあって、それなりに気に入っている。今現在は『アラーム』と言う銘で、識乃ちゃんがやってきたせいで崩れかけている僕の体内時計の修正を担ってもらっている。

現代の携帯電話所持者はこんなに便利な生活を送っていたのかと感嘆した。その旨をそのまま識乃ちゃんに伝えてみたところ、『現代の携帯電話不所持者はそんなに不便な生活を送っていたのかと可哀想に思えてくる』と言いつ返された。彼女も随分ことは遊びに慣れてきたようで時々鬱陶しく思ったが、それも僕のせいだと思うと、少し切なく思える。

とまあ、少しというか、大胆に話がずれたがこれらが僕の近況であつた。

ああ。

言い忘れていた。

彼ら二人が忙しい理由は『バイトと僕への嫌がらせ』で言いのだろつが。

僕が、年末年始をどたばたと過ごした理由は他にある。

この僕の事務所が。

予約で埋まってしまう程、一般のクライアントが後を絶たないのだ。

@@@@

僕の住むこの街では、今この名前で持ちきりだ。

『ピエロ』

それは、殺人鬼の通称だ。ピエロの被り物を被り、不意に笑い声を上げながら無差別にヒトを切り裂くのだと言う。それも、こんな田舎でだ。そんな奇抜な輩が現れれば、騒ぎにならぬ訳は無い。しかしそれなのに、目撃情報がほぼ皆無に近く、凶器も見つかっていない状況が続く、住民はもともに外出もできないのだとかなんとか。しかし目撃情報が無いのに誰が『ピエロ』などとありがちな通里名を与えたのだろうか？ まあ、噂とはそんなものなのだろう。

しかし殺された方々には悪いが、おかげで我がカウンセリング事務所は大繁盛していた。年末年始の二週間ほどで二十七人を殺し回るといふ快挙と言いか暴挙を上げて、住民の心を乱すだけ乱したのだ。人々が逃げ道を求めたのは妥当な事だと思う。識乃ちゃんが家に来て以来、何故だか街中に挨拶回りに繰り出す事になった訳で、そこそこに僕の認知度と人気度がにわかに上昇した。それも相まって、年末年始は実に大忙しであった。夫が被害者になった女性、ボーイフレンドが被害にあつた少女、息子を殺められた母親など、数多くの様々な『一般人』が事務所を訪れた。野次馬に近いような人まで、不満や不安をぶちまけに僕を訪ねた。

「トモさん、トモさん」

識乃ちゃんの聞き慣れた声が僕の鼓膜を震わせ、僕はリックから顔を上げる羽目となった。リックと言うのは僕のスマートフォン機種名である。

「なんだい？ 識乃ちゃん」

「頬が弛んでますよ？ 涎垂らして。そんなに携帯を愛してしまうんなら買わなきゃ良かった」

「涎は垂れてないし、僕が好きなのは、識乃ちゃんだけだよ」

識乃ちゃんの顔がだらあつと歪み、気持ち悪く体をくねらせた。舞い上がったせいで自らが言うべき台詞を忘れたのであるう、どこかへ行つてしまった識乃ちゃんに向けて軽く溜息をつき、獏也に視線を向ける。獏也は可愛げの無い背中を僕へ向け、フローリングの上で眠れる森の美女が如く、深い眠りについていた。

リックの画面の右上を見ると午後二時を指そうという所だった。デジタル時計の表示は無機質で機械的で少し嫌いだ。だからと言って、掛け時計か腕時計しか見ないというような宗教じみた事に体を預けた記憶も無いので、もう一度デジタル時計を見て、改めて午後二時を指している事を確認する。

仕事で忙しい体を休める獏也を起こす事に少し躊躇いを覚えたが、仕方ない。と踏ん切りを付けて、獏也の体を揺すった。

「おい、獏也？　ちよつと起きろよ」

「……………、あ、んあ？」

寝起きの悪い彼にしてはあつさり目覚め、僕は少し驚いた。もしかしたら初めから起きていて、寝たふりをしていたのかも知れない。何の為に？　いや、考えすぎか。

「いや、嫌だったらいいんだけど、折角の休日なんだから、ベッドで寝ていいぞ？」

「え？　ああ、マジか！？　ありがとう、いやホントありがとう！」
何がそこまで嬉しかったのだろうか？　無駄にハイテンションになつて獏也は僕のベッドにダイブして、そのまま寝こけてしまった。

——きつと寝てるところを起こされて、不機嫌になっているの無理したんだろうな。

獏也の心境を考えるとナーバスになれずには居られず、彼を起こした事をそこはかとなく底なしに後悔した。

おもむろに僕の部屋を訪れいきなり自宅に帰つて行つた識乃ちゃんが存在を思い出し、彼女を追いかけるように部屋を出た。出てすぐに鍵を閉めておかないと、と思い直して部屋に戻り、鍵を取り出

し外から締め、小さな声でおやすみと獺也に向けて言った。

ちなみにこれが獺也に向ける最後の言葉に……。

@ @ @ @ @ @ @

識乃ちゃんの家というか、事務所に行くと、識乃ちゃんが見知らぬ女性とソファで談笑していた。

「……、識乃ちゃん、その方は？」

「ああ！ いい所に来ました。トモさん、臨時のクライアントさんです。矢崎那子ヤザキナコさんです」

なんと。

識乃ちゃんは言い忘れたクライアントの来談だった。そんな事をよく忘れる事ができる。二時十五分からカウンセリングの予約が入っている事も忘れていたのだろうか？ 忘れていたのだろうか？

「あの、矢崎さん？ 非情に申し訳ないのですが、実はこの後に予約が入ってまして。お時間と言いますと……」

「その事に関して、一切問題無い。であります」

顔だけをこちらに向け、限りなく無機質で使い慣れないのである。う敬語を使い、僕の言葉を遮る女性は不敵に笑っていた。

「？ と、言いますと？」

「後から来る人間もウチの仲間だから。……です」

識乃ちゃんとの談笑中はこんな殺気を出していなかったのか、識乃ちゃんが彼女を見て怯えていた。暫くして識乃ちゃんは立ち上がり、僕の傍にやってきた。

どうしようもないほど重い空気が流れ、識乃ちゃんは勿論、僕も

口を開く事に躊躇を覚えた。

@@@@@@

まもなくしてインターホンの音が部屋に響き、約十分間微動だに
しなかった僕や識乃ちゃん、矢崎でさえ反応することを余儀なくさ
れた。

ハイハイ、などと言いながら玄関に向かいかけた識乃ちゃんに
ストップを掛け、代わりに僕が玄関に向かう。

鉄製の薄い扉の覗き穴に目を当て、外の様子を確認して、変に納
得した。

——はあ、こんなところだろうと思ったよ。

玄関の前には。

そこには。

ピエロが満面の泣き笑いを浮かべて、ドアの前に立っていた。

ここで思い留まっても、大した打開策は思い浮かばないであろう
し、何より陣内に敵を一人招き入れてしまっている。どうこうする
事はできないだろう。このまま放置していれば、隣人の小石^{コイシ}さんか
達さんとかが、あるいはどうにかしてくれるかも知れないが、ご近
所さんにそんな迷惑を掛ける訳にはいかない。やはりこちらも自ら
招き入れるしかないのだろう。

重いくだらない考察の間にも、もう一度インターホンの軽い音が
響き、僕を急かした。

仕方なく。不本意に。

僕が。

僕が自らドアを開き、ドアの前に立っている人間を招き入れた。

招き入れてしまった。

これが、無理矢理の強行で事務所に押し入られていれば、どれだけ楽だっただろうか。

予想通り識乃ちゃんは短い悲鳴のような声を上げ、居所悪そうに部屋の隅に逃げた。

ピエロはグレーの上下一式のスーツを着ていた。ピエロの正体は女性な様で、胸部の膨らみが着ているインナーとスーツを押し上げていた。更に腰の幅も女性のそれで、ピッタリのスーツが彼女の身体をより艶やかに魅せていた。ゴム製のピエロの被り物は、とにかく気持ち悪かった。にたあつとした満面の笑みなのに、右眼からは涙が垂れており、なんとと言うか、狂気に満ちていた。その被り物の下からは細い線の首筋が伸びており、その人物が女性であることを再確認させられた。そして、彼女の右手に握られているのは……、ルーズリーフの束だろうか？

結局ピエロは一言も発することなく、矢崎さんの横に深々と腰を下ろした。僕も彼女らの向かい側に座り、識乃ちゃんを招いてみたが、さすがに嫌だったらしい。

「ここでいいです、……はい」

囁き声かと思うほど小さな声で僕にそう言った。今回に限っては知らんぷりを決め込むらしい。自分の責任ではないとか言うつもりなら今度しっかりと叱ってやらないといけない。まあ勿論、僕の責任が一番多いだろうから今度しっかりと反省しなければならない。

それにしても残念だ。

そのうち、探偵業の方で依頼が入ると思っていたが。

県警から本格的に依頼が来るのではないかとか、淡い夢があったりもしたのだが。

こんな形で『ピエロ』に関わる事になるとは思っていなかった。しかし。

これは確かに認めなければならないと思う。

ここ二カ月半、生ぬるい生活を送ってしまったが為、油断してい

た。どうしようもなくしょうもない生活が尾を引いたのだ。どうしても識乃ちゃんを恨む心を拭い去る事ができない。彼女さえ来なければ、もう少し適切な対処ができていたように思えた。

限りなく甘かった。不覚だった。

兎に角。

どんな形であれ、僕らは。

僕らは先制点を決められてしまったのだ。

第二話というか、第三戦の一回表・零対零（後書き）

活動報告『FT小説』に書かせてもらった通り、これから諸事情で忙しくなり、更新が衰えてしまうと思います、。：：；

それでも書き進めるにはしっかりやって行きたいと思いますので、温かい目で長い目で見守ってやってください。

（慣用句の使い方が間違っている気がします、気にしないで！）

第三話というか、第三戦の一回裏・零対零（前書き）

今思うと、『世崎』『田町』『矢崎』。

似てる……！！

特に意味はありません。ハイ。

第三話というか、第三戦の一回裏・零対壱

@@@@@@

彼女、矢崎那子は語る。

「『ピエロ』と言うのは別に個人の名前じゃない。ウチとこの子はその一部に過ぎない。ちなみに、『ピエロ』と言う通り名もメンバーで広めた」

誰が広めたのかと思ったら、当事者が広めていた。成程、随分と事故主張の激しいチームらしい。

矢崎那子はなおも語る

「おまえは随分と面白い仕事をしていると聞く。ウチらの初仕事の場をこの街に決めたのは他でもない。おまえへの挑戦、そして……仲間が到着したことによって、敬語を使う必要が無くなったからか、幾分か楽そうに見えた。敵にでも、こんな風に顔色を窺ってしまつのは、いわゆる仕事病と言うやつであろう。」

「そして？」

僕は躊躇う矢崎に問いかけた。

「ウチらがどこまで通用するのか、おまえを使って検証する」

「……」

成程。

そういう訳か。

何故僕の所に？　と言う唯一の疑問が拭い去られた。あまり有名な所を突いて、大々的に扱われるのは困るらしい。

「ですが、矢崎さん？　……」

言いかけた所で、それは偽名だ、と訂正された。

「失礼。ですが、僕達にはあなたの挑戦を受ける義理は無いのです
が」

「……いや、ある」

先ほどの訂正とは打って変わって溜めに溜めたその返事は、どこか、不穏な雰囲気を感じていた。僕の右の眉が自然と吊り上ったのが自分でも分かった。それを感じ取ったのかどうかは分からないが、名前も分からない彼女は、不敵に笑って続けた。

「五十二インチのテレビはいいな」

「……？ 何故して……」

「リックなんかも高級品なんだろう？ 結構金を持っているんだな」僕の言葉を遮ってまで強引に語り続ける彼女はどこか勝ち誇っているように見えた。

「それもこれもあの居候のお陰なんだろう？」

「『おかげ』では無いですが。何ですか？ 『計画的な犯罪だから、受け入れなければ貴様の生活を破綻・あるいは貴様の命その物を奪わせてもらうぞ』的な話をしているんですか？」

頭の中で整理したのだろうか、少し間を空けてから、当たらずとも遠からずと、自信有り気に言い張った。

言って。

言い切って。

胸を張って。

威張った。

「狙うのは貴様の命でも貴様の生活でもない。」

何が狙いなのか本当に判らず、今この状況を今一度見回した。彼女の話している間、識乃ちゃんはずっと黙っており、ピエロの女性はルーズリーフを折り紙代わりに遊んでいた。ソファとソファの間の低めのテーブルの上には様々な動物と化したルーズリーフ達がいっぱいいるのポーズを取っていた。

——分からない。何を僕のメリットに使った？ 金か？ なら、あんな話をしないか。地位？ 僕にそんな物が必要ない事も分かっているだろうからそれも無し、か。

「そろそろ、じゃ無いかな？」

僕の自問自答を見透かしたようなタイミングで彼女は言い、僕が、何がですか？ と問うと至極簡単に答えた。

「おまえの復讐心が芽生える瞬間だ」

「……っ！」

——そうかつ！ 何故気付かなかったんだ！

僕は自分でも気付かないうちに立ち上がり、走り出していた。後ろから僕を呼ぶ識乃ちゃんの声が聞こえた気がしたが、僕の体は立ち止まるうとはしなかった。

彼女達、ピエロは集団だと言っていた。ならば、僕と対峙していたあの二人以外にメンバーが居たと考えても不思議でない。もっと言えば、事務所で僕と『ピエロ』が会話している間にも自宅に『ピエロ』を送り込む事が可能なわけなのだ。

『ピエロ』は。

『ピエロ』は僕の親友を殺し、僕の復讐心を駆り立ててこのゲームに参加せざるを得ない状態を作り出すつもりだったのだ。

だからか。

わざわざ予約を入れたにも関わらず、先に一人を事務所に送り込む意味が分からなかった。事務所ではなく、直接自宅に来ればいいではないかと。

それは。

識乃ちゃんと僕が事務所に居なければならぬ状況を作り出す為だった。

裏を返せば、自宅に『あいつ』が一人で居る状況を作る為だったのだ。

——あああ！ 自宅が隣だったら、物音ですぐ気付けたのに！

自宅の横に事務所に設けなかった事を本気で後悔しかけたが、このアパートの廊下は勿論、そんなに長くもないので、考察する間もなく二〇五号室に到着。振り返れば、後ろから識乃ちゃんも追いか

けてきていた。

走ったせいか、かなり落ち着いた。少なくとも識乃ちゃんを待つだけの余裕はできていた。識乃ちゃんが追いついたのを待って、余計な口を挟んでしまわぬように、ドアノブに手を掛けた。

「駄目だ。鍵が掛かっている」

独り言のように呟き、懷を弄り、鋏剪刀を取り出した。どっちがどっちかなんて確認する精神は持ち合わせてなかった。兎に角鋏を分解して、右手にあった方を半ば無理矢理に鍵穴に突っ込んだ。左手にあった方は無造作に投げ捨てた。

——無理だ！ 刀身が太すぎて入らない！

やりきれない状況に目頭と目じり、頬や頭が熱くなっていくのを感じながら、それでも刃物を差込み続けた。識乃ちゃんが僕をなだめるように言うてくれなければ、僕はこの場で泣き碎けていたのではないかと思う。

「大丈夫です、落ち着いてください。トモさん、事務所に来た時鍵持っていましたよ。左のズボンのポケットにしまっていました」

「何だよ！」

識乃ちゃんを振り返った僕の顔は鬼の形相だったのだろう。識乃ちゃんは一瞬ビクつき、それでも僕の顔を正面から覗き込み、静かに僕の眉間に触れた。

僕が以前やったように、眉間の皺を伸ばした。

伸ばしてくれた。

そのお陰で、ここで焦っても意味が無いと思い直す事ができた。まず鋏剪刀を拾い上げて、ホルスターにしまい、自らの左太腿フトモモに触れた。金属らしき質感を確かに感じ、改めてポケットの中に腕を突っ込む。

握り締めて取り出したソレは確かに自宅の鍵だった。それを今度は静かに鍵穴に差込み、左に回した。ガチャガチャと気だるそうな

音がして、扉の錠が外れた事を知らせてくれた。

「ごめん、識乃ちゃん。……、ありがとう」

ドアノブを握りながら言って、鉄製の安っぽいドアを開いた。

廊下の向こうから漂う鉄分のような臭いに生臭さを覚えて、奥まで這入ることを躊躇う。それでも何故か、足は勝手に進み、靴を脱ぎ、踏み入った。

心拍数は上がらなかった。

自然と落ち着いていた。

短い廊下を抜けて、リビングに立ち入った僕の目に嫌な光景が飛び込んだ。

黒い血溜りに顔をうずめた状態で、人間が倒れていた。

@
x 1 0

「獏也、取り敢えず説明してくれ」

僕は、半ばキレ気味に言った。

——そう言えば、『キレる』なんて初めてだ。

僕の感慨深い心境を打ち砕くように、男、獏也は答えた。

「いやな？ 寝こけてたらさあ、物音が聞こえてきてよ。寝てる所邪魔されて、激しくムカついたからぶん殴ったんだわ。はは、そしてたら人違いでな？ ギャはは」

なんとこの男、鼻血で血溜りができるほどの勢いでヒトを殴ったのだと言う。その後、もう一度寝ていた、と言う所に獏也らしさを感じる。

『これが猯也に向ける最後の言葉に……ならなかった』というオチ。

「人違いって、誰と？」

僕が尋ねると、猯也は無言のまま、こつちを指差した。僕はおるか、僕の横に居る識乃ちゃんでさえ溜息をついた。

僕を殴らないでくれ、と答えると、猯也はカラカラと笑った。

部屋の隅で、ロープでぐるぐる巻きにされつつ、気絶状態を続ける女性に目を向ける。続けて、目の前のテーブルの上に置かれた『ピエロの被り物』とルーズリーフに視線を向けて、改めて溜息をつく。

すると、僕の顔を覗き込むようにして識乃ちゃんが言った。

「でも、アレですよ。あんな前フリで本当に彼が死んでたら、それ程つまらない事も無いですよ？」

「識乃ちゃん、滅多な事言わないの」

「ん？ それを言うなら『メタな事言わないの』の間違いなんじゃないの？」

「黙れ、猯也。誰が上手いこと言えた？」

そんなこんなしていると、軽いうめき声と共に部屋の隅の女性が目を覚ました。

「う、うう、……っ！」

「おう、目え覚めたか。悪いな、気絶させちゃってよー」

猯也の言葉に、女性は顔に困惑と憎悪の入り混じった表情を浮かべるばかりだった。

これからどうするべきか、迷う。『ピエロ』の目論見は失敗に終わり、勿論僕に復讐心は宿っていない。ゲームに参加する必要はなくなっただけだ。

なくなった。

わけだが。

猯也の無事を確認した、あの後。ダッシュで事務所に戻ってみた

が、そこはすでもぬけの殻であった。テーブルの上に、無数の動物と一つの書置きがある以外、いつもの日常と変わらなかった。

異様な殺気をダダ漏れにしているあの女性も。

首から上がピエロの華奢な容姿のあの女性も。

そこに居た気配すら残っていなかった。

しかし、その唯一の残っていたその書置きが気になった。

【もう少しすれば、市警の方からそちらに正式な捜査協力要請が来ると思う。今は時間も無いので、詳しくはそちらに聞いてくれ。取り敢えず、頑張ってくれ。】

ピエロの持っていたルーズリーフに書かれた三行ほどの文。

先述したように、僕にはもう『ピエロ』と対峙する理由が何一つ残っていないのだが。なんだろう、嫌な予感がする。市警からの協力要請とはどういうことであろうか。犯行声明文でも届いたというのだろうか。

まあ、獺也が殺されるところか、敵を一人捕まえることができたのだから、こちらも一点返したと取って良いのだろう。スポーツでは普通、取られた点は消す事はできない。僕はいつも不思議に思っていたが、一点取り返せばいいのだからいいか、と思考する事を止めた。

時計を見て、驚いた。ピエロが事務所を襲ってきてからまだ一時間経っていなかった。

僕がぼーっとしている間も識乃ちゃんと獺也は喧しく女性と話があっっていて、それでも僕の耳には彼らの声は一切入ってこなかった。虚ろな心境で女性に意識を向けると、女性が一切口を開いていない事に気付いた。『話しあっている』では無く『話しかけている』が正しいようだ。

不意に部屋の中にインターホンの音が響いて、僕の意識が体に戻る。

僕は、はいはいと、声を上げ、立ち上がった。視界の隅で例の女性が口角を吊り上げたように見えた。

覗き穴から外の様子を窺うと、スーツの男性が一人で立っていた。当たり障りの無い表情で立ちすくしていた。

特に危険も無さそうなので、普通にチェーンだけ掛けた状態で扉を開き、どちら様ですか？ と声を掛けた。

「こういうものですが」

捜査協力要請。

お決まりの言葉で警察手帳を胸ポケットから取り出す男性。ガツチリした体躯の、言うならば柔道選手を連想させるようなその男性は、僕よりももっと後ろ、部屋の中に興味があるようだ。

その時、部屋の置くから上擦った声が響いた。

「浦安さん！」

僕は吃驚して、一瞬後ろを振り向いた。識乃ちゃんの声ではなかったから、ピエロの声だろう。

「すみません、今立て込んで……」

再び前を向きながら放った僕の声は強制終了させられた。

眉間に黒い筒状のものが。

鉄の塊の先端が。

眉間に拳銃の銃口が触れていた。

「えっと……、発砲許可は出ているんですか？」

「人命の方が大切なんだよ」

男の声は静かだったが、とても強い意志がこもっていた。

——あー、これはマジで撃たれるかも。

ふと男越しに空を見れば、大雨が降っていた。

——今朝はあんなに晴れていたのに。

雨脚に引く気配は無かった。

第四話というか、雨天により試合中断（前書き）

もうちよつと書いてから出したかったのですが、それには少し時間が掛かりそうなので、この程度で許してやってください^^;

第四話というか、雨天により試合中断

@ x 1 0 @

「何故、崎波さきなみを生かしている？」

「仰っている意味が分かりません。彼女、崎波って言うんですか？」
「相手を興奮させないように笑顔で対応したのだが、かえって逆効果だったようだ。浦安つらやすと呼ばれた大男は拳銃の安全装置を外し、引き金に指を掛け直した。そして、言った。

「ここにくたばりたいか、『ピエロ』」

——え？

僕の中の時間が一瞬止まり、思わず頭を振ってしまった。反射的に浦安さんが引き金を引いていくのがスローモーションで見えた。その時、再びあの声が聞こえた。

「待ってください！ 多分ですが、この人達は『ピエロ』じゃないです！」

これほど助け舟と言う物を身を感じた事は無い。大船に乗った心地にはさすがになれなかったが、九死に一生を得たぐらいには思えた。

確かに僕らからすれば、『いやいやいや、あなたがピエロでしょう。僕らがピエロなわけないでしょうが』と言う感じではあったが、殺されてしまうのは少し困るので、まあいいだろう。

どういう？ と浦安さんは言い、僕は、よければ上がりますか？
と言った。

取り敢えず。

識乃ちゃんと獺也は居心地悪そうにしていた。

「このピエロのマスク、あなた方ではないのですね？」
さきなみみかぜ
崎波美風刑事の問い。

「おい、獺也」

僕の怒った声。

「知らねえって、寝ぼけてたし。俺のではないし、その女の物でも無いんなら俺は本当に知らない」

獺也の投げやりな声。

「お二人、本当に警察なんですか？」

識乃ちゃんのふて腐れたような声。

「警察手帳をもう一度見せましょうか？」
うづらやすしめんと
浦安俊杜刑事の嫌味な声。

「でも、美風さんは警察手帳持ってませんよね？」

僕の確認をとる声。

狭い。

狭すぎる。

まあ、致し方ないから仕方ないが。

それより、美風さんは確かにそんなものを持っていなかった。気絶している間に彼女の持ち物を調べたが、そんなもの出てこなかった。そもそも服装に無理がある。普通に女の子がオシャレしているような格好だった。『ピエロ』ならあり得ないことも無いが、警察と言うとさすがに無理がある。

僕が疑問を頭の中でリピートしていると、本人が説明した。

「今日はわたし、お休みだったんです」

「成程。普通捜査時は二人ペアでないと行動してはいけないと言う義務があるのに、一人ずつ順に訪れたその理由もそれですか？」

僕の確認に、今度は浦安さんが、鋭いですねと、答えた。

「識乃ちゃんと獏也は今後口を開かないでね」

忠告をして、刑事二人と改めて向かい合う。

「さて、整理しましょうか」

@x10 @@@

どこから話せばいいのだろうか。

ではまず、今日の二時十五分頃。僕の家にはピエロが訪ねてきたのと同時刻。

市警に一報が入った。

《ピエロを目撃しました。ピエロのマスクとナイフを携えた男がアパートに入っていました》と。

詳しく聞けばそれは『月見里獏也』、その人である可能性があるとか。

現場に最寄の警官に現場確保に向かうように無線を使って連絡が回ったことは言うまでもない。

時はほんの少し遡り。

崎波美風は、久々の休暇を満喫しかねていた。いくら休暇と言っても、連続殺人が起こっているこの街のだから仕方あるまい。もっと言えば彼女の職業は警察官である。この状況を心から楽しめるような精神は存在していなかった。

友達二人と歩いていた美風であったが、道の向こうにただならぬ雰囲気をした警官を見つけ、友達に別れを告げた後警官に駆け寄った。

見ればその警官は顔見知りであったこともあり、気軽に話しかけた。そして、本部からピエロ目撃情報の連絡があったことを聞いた。その現場は美風の位置からすぐ近くであった。

警官は近くの駐車場のパトカー内にパートナーを待たせていたこともあり、美風に別れを告げかけた。

美風はそれに待ったを掛け、もう一度現場の位置の確認を取った。ヒールに慣れていなかったのだろうか、一度警官に寄りかかるように倒れた。

警官が駐車場に向かう途中、腰に違和感を感じ触れてみると警棒が無かった。

そして、市警本部。

浦安俊斗に個人的な連絡が入った。

「崎波さんに警棒を盗まれたっぽいです。多分、例の現場に向かったかと思います」と。

通話は長話にならぬほどに終了し、浦安は怒りから大きな溜息をついた。

浦安俊斗は上司に叫んだ。

「係長、崎波の馬鹿がまた無茶やっただけです！ 拳銃携帯許可をお願いします！」

準備を済ませ、浦安は署を飛び出した。現場まで、三十分ほど掛かりそうだった。

その頃美風は現場に到着し、通報のあった二〇五号室に向かった。警棒を構えなおし、ドアノブに触れた。鍵は掛かっていなかった。物音がしなかったことからすでに逃げられたかと思い、奥に進むと男がベッドで寝ており、床にはピエロのマスクがあった。

状況判断に迷い部屋の様子を確認していると、いきなり気を失った。

「あれ？」

という声が聞こえたことだけ覚えていた。

……………。

考えてみれば、ここまですべて『ピエロ』の計画であつたのだらう。居候が獏也である事はバレていないと高をくくっていたが、やはりそこまで甘くなかつた様だ。

敵を捕まえたとは大盛り上がりしていたが、敵どころか国家権力を敵に回してしまうようなマネをしていたわけだ。

おそらく、『ピエロ』は僕、もしくは獏也が警察官に撃たれる所まで予想に入れていたのだらう。【とりあえず、頑張ってくれ】とは、そういう意味だったのだ。

しかし、僕は生き残つた。これは、僕の運が良かったと言つていいのだろうか。それともやはり、獏也の運がずば抜けてよかった結果かもしれない。

いずれにせよ、『ピエロ』とはそうとうにキレる連中のようなのだ。警察任せにはしておけないのかもしれない。

第五話というか、試合再開・マイナス巻対式（前書き）

ちよつと叙述が足りなかったようですが、事務所に残っていたルーズリーフと、トモ自宅のテーブルの上の被り物と並んで置いてあったルーズリーフは同じものです。

第五話というか、試合再開・マイナス巻対武

@x10 @@@@

しかし、だとすると。

「少し、気になる点が幾つか浮上しますね」
そう。

色々、不可解な点がある。

「まず、美風さん、あなたがここを訪れた時、部屋の鍵が開いていたんですね？ 僕は確かに閉めたのですが」
更に。

「更に、中にピエロのマスクが落ちていたとか」

「はい、その通りです」

そして。

「そして、あなたが持ち込んだという警棒、どこに行ったのでしょうかね？」

「思わせぶりに発言してみたものの、しかしそこで浦安さんがいい加減にしろと、言った。」

僕が一人で警察二人に設問したのがいけなかったようだ。

「お前らの容疑は晴れていない。あんたは話を通じるようだから、こうやって話し合いの場を設けているが、俺の本望ではない。寧ろ、こういうことは書記係の居る取調室でやりたいとこだ。なあ、崎波？」

そう続けて、僕と美風さんをキツと睨んだ。まるで、『お前のヘマのせいで署の方に顔が立たないだろうが。』そう言っている様だった。

美風さんは、すいませんといいながら肩を竦め、僕も彼女に倣った。

「すでに署の方に連絡はしたし、お前ら……、特に月見里獺也！お前らは重要参考人として、しょっ引く可能性があるからな」

確かにこのタイミングで獺也が何かすればまず間違はなく檻行きだ。何て言ったってこいつは死刑判決が出るのにさほど時間が掛からなかったせいで服役期間が半年ほどしかなかったのだ。仮にも同じ組織に居た人間が殺されに殺されたのだから、気が張って当然だ。向こうからすれば、どんな些細な事件であつたとしても、なんとかこじつけをして引つ張って行きたいに決まっている。

へいへい、と力無く言う獺也の表情が引き攣っているのが少し気になった。

@x10 @@@@

結局、二人は何もせず帰った。安浦さんの携帯に連絡が入り、飛び出すように家を出て行ってしまった。またこちらに顔を出すなど言っていたが、本気かどうか怪しいところだ。まあ、来るであらう。

「それにしても、大した事は何も話さず帰っちゃいましたね」

「うん……。もっと聞きたいことがあつただけけれど」

獺也はアルバイトに出掛けた。土建だ。何でも大通りの工事らしく、夜間にしか作業ができないのだとか。本来、獺也は非番だったのだが、一人欠員が出て、なんとかならないかと、連絡があつたのだ。

勿論獺也が免許を持っているはずなど無く、持っていたとしても逮捕されたその瞬間に取り消されている訳で、工事現場までの交通手段は必然的に徒歩だ。というかダッシュだ。ここから現場まで四十五キロ。集合時間は三時間後の午後七時半。フルマラソンに三時間掛けると言うのは確かにあまり速いと言えないかもしれない。し

かし獺也はリュックサックを背負い走り、その後土建で働き、その後また四十五キロある復路を走り帰ってくるのだ。少しは彼の凄さが伝わるだろうか。

と言うわけで現在、午後四時三十分。

「もつと聞きたいことって？」

識乃ちゃんが首をかしげながら僕に問う。

「ほら、色々と僕らだけじゃできない事が起こっているでしょ？」

鍵とかさ。完全にピエロが関与しているんだよね、この部屋にも」

「ほう」

「でもさ、だったら何で獺也を殺さなかったと思う？ 物音立てずに鍵を開けられる様な、美風さんとは真逆のような奴が寝ていた獺也を殺せないはずが無いんだよ。そう思わない？」

「うーん、どうですかね？ バクバクは強いですからね」

識乃ちゃんは右手人差し指を唇に当て、むむむと考え込んだ。

「まあ、あいつが強いのは僕が一番知っているとこ……、バクバク？」

「はい、バクバク」

今度はキョトンとした表情になった。

識乃ちゃんの表情がコロコロ変わる様子を観察するのはとても楽しい遊びではあるが、それ以上に問題である問題が彼女の口から発せられた事実に関して僕は無視せざるを得ない。

「えっと、一旦置いといて。あー、うん。獺也は識乃ちゃんをなんて呼んでる？」

「ん？ 『シキノン』ですけど」

——『ん？』じゃねえよ！ で、『シキノン』ってなんだよ！

キャラが崩れるような口調で、いや口調と言っても心の中だが、兎に角そんな口調で叫び、軽く机を叩いた。

「うん。分かった、確認させて。『バクバク』ってのは、あの月見里獺也の事ではないよね？」

「あの、月見里獺也のことですが」

「……………」

特に、望んで無音状態を楽しもうとしたわけではないのだが、自然に言葉が出なかった。自然な声が出なかった。

「え？　なに……、つつつ付き合ってるの？　二人」

自分でも驚くほどの低い声だった。そしてどもった。

「……………」

人間が呆ける様子を間近で見るの機会はなかなか無いので、この機会にじっくり観察してみようか。いやいや、今はそれどころではない。

「いやだから、二人は、付き合っているの？」

「二回言った!？」

そう言えば、二人が揃っているところに僕が加わるところはあまり無かったから、お互いの呼称なんて聞いたことが無かった。

『シキノン』!？　『バクバク』!？　ふざけるな！　獏也の奴帰ってきたら鋏剪刀で坊主にしてやる。

——そんな柄でもない野蛮な想像を膨らませた。

……………。

……………。

どうやら、実に恥ずかしい事に脳内描写と地の文が入れ替わってしまつほどに混乱していたようだ。本当に柄でもない。

そう。

柄でもない。

「ご、誤解ですよ!？　トモさん！　いやだって……」

「いやごめん。いいんだ、分かった」

こんな感情もあつたのかと、と半ば清々しい気持ちになり、識乃ちゃんの声を遮った。

「ちよっ？　それは、どういう……?」

何か勘違いしていませんか？　と問う識乃ちゃんにストップをかけて、おもむろに本題を投げかけた。

「じゃあ、そろそろ本題に話を流すよ？」

「そろそろ本題に話を流しちゃうんですか!？」

「獏也は死んでいなかった。いや、殺されていなかった」

「……無視ですか？」

ツツコミながら顔を伏せてしまった識乃ちゃんの顔を上げさせて、続ける。

「でもさ。だったら、僕の復讐心なんて駆り立てられないでしょ」

「ややこしいですねえ。なんですか、バクバ……、獏也さんがボコつてなかったとしても、そもそも。って事ですか？　だったら、『トモさんの復讐心』どうのこうのが全部デマだったんじゃないですか？」

——デマか。それが一番妥当かな。でも、違う。今回に限ってそれは無い。

「じゃあこれは一先ず、置いておこう」

「あ、私気になってる事があります！」

識乃ちゃんが自分から意見するなんて珍しい。いや、成長したという事か。成長しようとしているものを拒否するような非道な心を持ち合わせていない僕は親切に話を聞いた。

「美風さん……でしたっけ。警官から、なんで拳銃じゃなくて警棒を取ったんですかね」

「うん、そこか」

——そこでしたか。

「パトロールしてるお巡りさんの持つてる拳銃なんてダミーだからね、武器にならない。脅し程度にしかないんだよ。もつと言え、拳銃はチェーンで腰に繋がってるから簡単には取れない」

「成程成程」

「僕が気になっている事を言っていいいかな？」

「難しそうなので嫌です！」

「……」

——拒否された。拒否されてしまった。

項垂れて、俯いたまま必死に言葉を紡いだ。

「じゃあいいよ、もういいよ。君は獺也と仲良くしていればいいさ。僕は今から、とても長い独り言を永遠と言ってもいいほどの長い時間ぶつぶつ言い続けるから。矢崎那子の事とか、ピエロの武器はナイフでは無いであろう事とか、ルーブリーフの事とか色々話したいことがあったけれどいいよ、話し相手が居ないなら。そうだよ、そもそも識乃ちゃんに言っても仕方な……」

徐々に早口になっていくのが自分でも分かり、さすがに大人気無かったかと思いつて、顔を静かに上げた。ごめん、と言おうとしたが、それも強制的に拒否された。

識乃ちゃんは、僕の目の前で寝ていた。

やるせない気持ちになったが。

しかしどうだろう。

真面目な話、あの警官二人と大して実のある話ができなかった。

『ピエロ』には彼らから詳細を聞くように言われていたのだが、その願いも実らなかった。まあ、まず間違はなく浦安さんは再びここを訪れるだろうから、その時改めて聞こうか。だがしかし、『ピエロ』は一体全体どうしたいんだろうか。識乃ちゃんはああ言っていたけれど。

『復讐心が芽生える』

……口からデマカセではない気がする。デマカセでないのだとすれば、何が僕の復讐心に成り得る？ 何が僕を掻き立てる？

考えても仕方が無い事も分かっているが、だからと言って何か行動することも特に無い。どうこうすることもできない。今は警察、もしくは『ピエロ』の動きを見るしか無さそうだ。

そうだ。

そういえば。

隣人の小石さんの愛しき妹さんが今こっちに来ているらしい。こ

こ最近バタバタしていて、挨拶に行けていない。何かが起こるまで何もしないことは弱者のすることである、と数多くのどこかの誰かが言ってきたが、僕は弱者どころか人間であるかどうかとも怪しい存在なので、何かが起こるまで存分に暇を潰させてもらおう。勿論、事件には一切関係のない事だ。

獏也に対する同じアパートの住人の紹介も兼ねて、少し羽を伸ばそうか。

とりあえず。

今日のところは本を読みふけり、ゆるりとやってくる睡魔に体を委ねるとしよう。

第六話というか、第三戦の二回裏・マイナス式対式（前書き）

最新の更新からもう少し進めておけばよかったな、としみじみと思いました。

読み直して「あれ？ こんな展開だっけ」とすごく戸惑いました。展開を記した手書きのメモを探すのに一週間ほど掛かり、やはり指先が鈍っていたのか、打つのが遅い遅い^^

まあ、でもこつから頑張っていきますので。どうぞよろしくおねがいします^^

第六話というか、第三戦の二回裏・マイナス式対式

@x10 @@@@

識乃ちゃんを一旦起こそうかとも思ったが、彼女のその惚れ惚れする程気持ちの悪い寝顔を見ていると、起こすに起こせなかった。仕方なく、静かに彼女の体を持ち上げおんぶする。やはり起きそうにない。一度深々と溜息をついてから、玄関をくぐった。後ろ手にドアを閉めようとして、事務所の鍵がどこにあるのか分からないことに気が付いた。ピエロが消えた後、僕は事務所の鍵を掛けていない。さりとて、開けっ放しと言うことも無いだろう。

——だとすると……。

だとすると。真に残念ながら、僕の背中に居るこの謎の生命体の衣服のどこかに鍵が隠されているということになる。仕方あるまい。手を掛けていたドアを勢い良く閉めることで気合を入れ直した。

識乃ちゃんを下ろし、閉めたドアにもたれ掛かるように座らせた。恐る恐る手を伸ばし、識乃ちゃんがビクツと動いたので引つ込める。

——いやいやいや、これは違う。決して卑猥な行為ではない。大丈夫だ、問題ない。彼女の衣服に付いたポケット数箇所に手を入れるだけだ。しかし周りから見るとどうなのだろう。この状態はあまり好ましくないのではないか？ いやそもそも、僕らは付き合っているのだからこんな考えを巡らせること自体がおかしいんだ。スツと入れて、スツと出すだけ。スツと入れて、スツと出すだけ。スツと入れて、スツと出すだけ。スツと入れて、スツと出すだけ……。

静かに、本当に静かに彼女の体へと手を伸ばす。起きてしまわないかと、識乃ちゃんの顔を窺う。

体が固まった。

識乃ちゃんの目が半開きになっており、その目はしっかりと僕を

見据えていた。口角も吊り上り、どこか期待しているような、挑発しているような、そんな表情だった。

何故そんな事をしてしまったのかは永久の謎だが、その顔を見た瞬間、識乃ちゃんへと伸びかけていた手はグーに変わり、極々自然な動きで彼女にボディブローを喰らわせてしまった。

「くぁはあっ！」

ともすれば吐血するのでは？　と思しき声を上げて識乃ちゃんは上半身をワントンポ遅らせて背面へ仰け反らせた。そして、頭を鉄製の扉にぶつけた。シンバルを打ち鳴らしたような音がしたのだが、果たして人間の頭を鉄に打ち付けるとこんな音がするのであったか。……いや、決してしなかったはずだ。

「ちよつと、大丈夫？　君の頭はどんな構造になってるの？」

僕は、右手で頭を押さえて左手でお腹を支える識乃ちゃんに紳士的に声を掛けた。

「だ、だいじょ……げほ……、ぶ、です。……う、はい」

識乃ちゃんは咳き込みながらも淑女的に対応した。自分の内臓にダメージを与えた人物に向けて、一切の怒号を浴びせないとは随分と容量の大きい心を持っているものだ。

「つてか、何やってんですか、トモさん！　自分の彼女に」

「……過大評価だったようだね。やっぱり怒るよね、普通ね」

ふと、先刻の怒りが何処かへ飛んでいつてしまっていることに気が付いた。

「痛いです！　痛いです、トモさん！　あつ、ちよつと待ってください。今ちよつと確認してみますから……っ！　やっぱり痛いです！」

「分かった、分かった。そう何度も言わなくても分かるよ。どこか痛いの？　この黄金の右手でさすってあげよう」

「本当ですか！？　マジですか！　ここです、ここ。ここ、ここ」

識乃ちゃんは鶏のような声を上げながら、自らの後頭部を指差した。なんとも、辛そうな姿勢である。そこまでして黄金の右手にありやかりたいのであろうか。『僕の右手は黄金の右手なんかじゃない

よ?』と言ってあげたほうがいいのだろうか。

僕はスツと手を伸ばし、識乃ちゃんの頭を撫でるように触った。

「ちよっ! どこ触ってるんですか!？」

「……頭だよ……」

「そですか」

「そだよ」

この後も一しきり惚気ていたのだが、そんな会話、何も面白くはなからうと思うので章変え。

@x10 @@@@

翌日。

午前十時。

一〇五号室前。

できれば。住人の仕事の都合もあつたりするのでもう少し早く挨拶回りに行きたかったのだが、猯也の睡眠時間を考えれば致し方無い。今日が休日であることを記すれば、国民は全員休みだと考える方も多いであろうが、『休日不定』という不安定な職種も存在する。実際、僕の両親もその手の仕事についていた。そして確か、達さんの仕事もその手のものだったはずなのだが、何故か達さんはそこに居た。

「あ。おはようございます。笹本さん。軒下ちゃん。……と」

達さんは猯也へと目を向け、『誰だこいつ』と窺っている。対して猯也も自身の本名を名乗ってもよいものなのかどうなのか迷っていた。

「おはようございます、達さん。こいつは今僕の部屋に住んでいる朋見里猯也です」

僕は言い、識乃ちゃんも後ろで「おひさしぶりです」と頭を下げ

ていた。僕の言葉に獺也が凍り付き、その後僕に「いいのかよ」と言う様な目を向けてきた。

「獺也・朋見里。獺也。ああ。あの死刑囚ですか」

獺也の心配を他所に、達さんは一人で納得していた。

「今、こいつの紹介回りに出てるんですよ。さっき大家さんの家に行つて来た所です。それより、達さん。インテリアデザイナーの朝はこんなに遅いんですって？」

以前達さんの説明をした時に、彼女の博打好きについて記したと思うが、決してそれが彼女の職種ではない。

少なくとも、以前最後に会った時にはその類稀なる才能を十分に謳歌させて『インテリアデザイナー』という格好良い名を持つ仕事を実に楽しんでいた。

それがなんと。

「ああ。クビを切られました」
だそうだ。

あまり聞いていいものではないとは思うがどうしても気になって問うてしまう。

「それは……、またなんで？」

「えっと。『あの、達さんの才能には、本当に、いや、ほんつとうに頭が上がらないのですが、そのですね。ほら、達さんって人付き合いとか苦手じゃないですか。もっと良い会社紹介しますので、こは今月いっぱいで辞めてもらうことになるのですが』と、言われました」

達さんの普段の無愛想ぶりからは想像することもできないほどの抑揚の付いた演技で、彼女の……上司？ いや、敬語だから上司が誰かに代弁させたのか。まあ、その人を演じていた。見れば識乃ちやんも彼女の演技にとっても驚いていた。

「後輩に？」

「社長に。です」

「……」

社長だった。恐るべし達真美。社長に敬語を使わせるとは。もう、なんか、危ない橋を渡り続けているとしか思えないではないか。

「しかし。人付き合いの悪さで解雇されるとは思っていませんでした」

「いや。多分それは口実で、本当の所は経営がしんどくなって人員を削らなきゃならなくなっただけだと思いますよ」

「……っ！ 本当ですか？」

「お。若干表情が変わりましたね、珍しい」

「そうですか？ わたし感情がすぐ顔に出るタイプだと思うんですが。ご近所さんからもよく『真美ちゃん、感情を隠せないタイプだよね』って言われますし」

「……僕もご近所さんのはずですが、そのような話は一切聞きませんよ？」

「それはホラ、ね？ 達さん」

急に識乃ちゃんが声を上げた。振り向くと、獺也も力強く頷いている。

「なんだよ、『ホラ』って。おい、獺也」

「おいおい、俺にそんなこと言わすなよ。聞かなくていい事だつてあるんだぜ？ 一度聞いたことを一生忘れられないお前なら尚更な」

「なんだかとても重く辛い話のようだ。確かに体質的にも聞かないほうがいいのかもしれない。うんうんと自らに言い聞かせながら、達さんに向き直る。」

「どうやら達さんは、後ろの馬鹿二人の掛け合いはよく分からないように手を顎に当てて首を傾げていた。肩に掛かるほどの長さの髪が右に揺れる。」

そして暫くして、アニメのように手をポンと打った。

「ああ、笹本さんがご近所さんに嫌われてるから、そういう話を聞かないだけって話ですか？」

「……」

……。

「僕嫌われてるんですか!？」

沈黙に耐えかねて、声を出してしまった。

すると識乃ちゃんが笑いながら達さんに声を掛けた。

「まっさか、それ冗談ですよ。そんな世界の常識今更言われてもって感じですよ。違います違います、もっとほら、声に出しづらい事があるでしょう? トモさんについて」

「今のも十分すぎるほどに声に出しづらい衝撃の事実だと思うよ!？」

僕のツツコミ(もとい、心からの悲痛な叫び)は軽やかにスルーされ、識乃ちゃんと達さんの会話は続く。僕のことは無視と決め込んでいるようだ。

「すると。あと笹本さんについて可哀想な事と言えば……」

「あゝあ、達さん。もう『可哀想な事』って言っちゃったっ! 識乃ちゃんが僕の心を抉る様にはぐらかしてたあの部分を思いっきり声に出して言っちゃったっ!」

「ほらー、あるじゃないですか。生……」

「もう言っつな! やめてくれよ、もういいでしょ、二人とも? 何よ、識乃ちゃん、『生』って。何を言おうとしたんだよ。……やめろ、口を動かすな。答えなくていい」

必死に掌を識乃ちゃんに見せて、制止を呼びかける僕。

——何故僕は女性二人にフルボッコにされているんだろうか。と言うか、やっぱり『生』が気になる。何なのだろう、僕に関連する可哀想な『生』……。生……。卵? 麦? 米? ……、ごみ……?

どんどんブルーになっていく僕がさすがに気に掛かったのか、猥也が僕の肩をポン、ポン、と二度叩いた。

……。

涙が出た。

その後、達さんに軽く別れの挨拶をして一階の住人を訪ねて回ったが、どうやら皆出掛けていたようだった。考えてみれば当然であ

る。休日なら家にいる、という考え自体が少し甘かった。休日なのだ、当然遊びにも行くであろう。先程衝撃の事実を突きつけられた僕としては若干ありがたい気がした。

途中、こんな会話をした。

『おい友。大家のばあさんと言い、さっきの超美人、俺のドストライクゾーンと真ん中の女性と言い、なんで俺が【月見里猯也】だと気付いても何の反応も無いの？ 何ここ、山籠りの達人の集まりなのか？』

『まあ、僕の知る限りでは山籠りの達人はこのアパートに住んでないよ。あと、お前が年上好きなのは知っているけれど、わざわざ達さんが好きです！ とは言わなくてよかったと思うよ？』

『なら、なんで皆黙ってたんだよ』

『猯也だけが辛い人生送ってると思うなよな？ ここは若干特殊だから、死刑を執行された人間が目の前に出てきたところで今更驚かないんだよ。ついでにここに住んでいる人達はおそらくお前には殺せないからな。怯える、うろたえる、怯む理由が無いんだよ』

『んあ？ 俺に殺せないってのはなんだ？ 人間的なそういう面を言ってるのか？ それとただ単に力関係とか実力差とかそういう話か？』

『さあ、どっちだろうな。もしかするともっと次元の違う第三の理由があるのかもな』

その後も猯也は『んだよそれ』とか『俺に殺せないような人間が集まっているアパート？ 宇宙要塞か何か？』とかぶつぶつぶつぶ言っていたが、基本的に無視した。

そして。

仕方が無いので錆付いた階段を利用して二階に上がり、僕の隣人の家を訪ねる。

「小石さん？ 小石さんは居ますよね？ 引つ込み思案な上に愛しの妹さんが来てるんじゃないですか？ 妹さん紹介してくださいよ。つか早く出て来い、寒いだろうが」

大きくドアをノック……というか、殴打しながら、大声で呼びかける。獏也は僕の性格を理解しているようで口調の変化に特に反応しなかったが、識乃ちゃんしちのちゃんは小石さん専用口調に動揺しているようだ。何だろう、おばあちゃんだと信じていた人が実は狼だった事にやっと気付いた赤頭巾ちゃんあかづみちゃんの驚きぶりを思わせた。

そんな無理矢理なたとえ話を考えていると小石さん宅の部屋の扉がギコーと怒りの声を荒げて、その中身をあらわにした。そしてその中から出てきたのは予想通り小石飛礫こいしつぱく、その人であった。

「うつせーよ、なんだよ阿呆面ぶら下げて。……ああ、後ろの二人はとても賢そうですよ？　なあ、こらお前は時間の感覚が抜け落ちてんのかよ、今何時だと思ってるんだよ」

——あれ？　確か現時間は、普通に人類が活動する時間で間違いがなかったはずなんだけど。……よし、じゃあこの左手首に巻かれた腕時計を確認してみるとしよう。実は、明るいだけで今現在真夜中だという可能性もあるからな。

自分があるいは間違っているかもしれないという忌々しき可能性を鑑みて、小石さんに悟られぬように極めて自然な動きで左手を上げ、時計を確認する。

そして、凄まじいスピードで先程に邪念を払拭した。

「あの、小石さん？　あなたは……なんですか、太陰暦で暦を数えてるんですか？　それとも何年か前からサマータイムでも導入しているんですか？」

たとえ先述のような物が導入されていたとしても、昼夜が逆転するわけではないのでこの場合一切関係無いのだが。

「ん？　馬鹿かお前は。おい、我が可愛い妹よ、この世間知らずのお兄さんに今何時か言つてやれ」

唐突に小石さんが振り向いて叫びだしたので、なんだ？　一人暮らしが寂しすぎてついに空想上の妹を見出し始めてしまったのか、と少し心配してしまったが、そう言えば愛妹が家に来ているのだったと思い直した。というか、今さっき僕が大声で『紹介しろ』とか

なんとか言っていたのだった。

すると奥から、可憐な淑女……もとい少女が登場した。

「お兄ちゃん、今午前十時半ですよ？」

「……へ？ 本当か……。おう、すまなかったな」

小石さんはバツが悪そうに僕に謝ったが、正直なところそれどころではない。人間のDNAは両親が同じであればある程度合致する点が出てくるはずなのだが、いや、そっち方面の本を手につけたことが無いのであまり知ったようなことは言えないのだが、それでも今ここにある現実がどれほどにありえないものなのか、それを判断することは可能である。振り向けば識乃ちゃんと獏也も僕と同じ表情をしていた。

形も違う、色も違う、笑う顔はいっしょである。

まあ、笑ってはいなかったが。

「ここに、小石さん？ いたいけな少女を家に連れ込むのは犯罪ですよ？ 法律で硬く禁じられています。細かく言えば……、失礼ですが年齢などお聞かせ願ってよろしいでしょうか？」

可憐な美少女に声を掛ける。

そう言えば『美少女』と言う単語は広辞苑第五版まではなかったらしい。何でも『美少年』の項目はそれまでにもあったらしいのだが、『少年』は成人未満を指すので広い意味で『少女』も『少年』に含まれるであろうという解釈があったためらしい。しかし、それはおかしいだろう！ 美少年と美少女を同じにするな！ 美男、美女の区別があつて、美少年と美少女の区別がないのはおかしいだろう！ という切なる僕の思いが届き、晴れて第六版では『美少女』の項目ができたのである。

さて、返ってきた答えは「十九ですが」と言うものだった。このお方が識乃ちゃんと同い年である事実は少し傍に置いていて。

「十九ですか。それはもう重罪ですよ、小石さん。本当に残念です、あなたがこんな事をするなんて。スカウターネタで遊びあった仲な

のに。刑法二二四条、未成年者略取及び誘拐罪が適用されます。法定刑は三月以上七年以下の懲役ですね。自首すれば、懲役三年程になるのではないでしょうか？　ですがそうですね、小石さんは誘拐したその娘さんに『おにいちゃん』と呼ばせていたり、洗脳しているようですし、異常性癖的部分が垣間見られるのでやはり懲役五年は硬いですかね。時にこの法律は被害者側の同意の下であつたとしても適用されますので、今からどんな入れ知恵をしたところで手遅れですよ、観念なさい」

「……熱弁のところ悪いんだが、カウンセラーさんよ。こいつ実の妹だからな？」

「嘘だ……」

「嘘じゃねえよ……」

「……………」

「……なんで涙浮かべてんだよ」

「い、妹さんが不憫で……」

そんな会話をしつつ、小石飛礫の妹——小石白砂こいしはくしゃさんの温かいお言葉に甘えて小石宅に上がらせていただく事にした。

白砂さんはその名の通りと言うのはどうかと思うが、色白で小顔で優しさが滲み出るような容姿をしていた。基本的に笑顔ではあるが、笑顔が解けた無表情の時でも自然とその人柄を受け取る事ができる。

短い廊下を歩きながら、前に行く白砂さんの長い黒髪が左右に揺れるのを眺める。

さて。

テーブルを囲むように座ってはみたものの、特に用があつたわけでもないので何となく気まずい。挨拶をしに來ただけです、とも言えず、何を話せばよいものかと考えていたところ、白砂さんの目線がチラチラと獺也に向いている事に気がついた。

「ああ、えっと。白砂さん？　この馬鹿面が気になりますか？」

「いえ、そんな。……あの、月見里獺也さんではありませんか？」

.....。

まあ確かに。全国民一億三千万人全員がこいつの顔を覚えていないなどとは思っていなかったが、これには多少なりとも驚いた。この人はなかなかの記憶力の持ち主のようだ。

「ああ、そうだけど。俺が月見里獺也だ」

先程の会話からなのだろうか。何故か偉そうな口を叩く馬鹿を軽く無視しつつ、白砂さんへと声を掛ける。

「知っているんですか？ 元同級生だったとか？」

「いえ、そういう訳ではないのですけれど。ほら、あの、ニュースで、死刑だとか、なんとか」

触れていいのか分からなかったのだろう、単語単語が途切れ途切れになり、語尾が徐々に小さくなっていった。

「獺也、お前の武勇伝を語ってやれよ」

「おうよ。いやな、これ本当、マジな話なんだけど。日本ではな？ 死刑を執行すればそこで刑終了なんだよ。なのに俺、死ななかったんだよね。呼吸不可能状態で気絶した俺を死んだと思い込んで、警察の方々、下ろしちゃったんだよね。んで、死体の様に扱われていた俺は、担架の上で息を吹き返したって訳よ。ぎゃはははは、マジウける」

「.....」

——何で以前と全く同じ語りなんだよ！

手抜きをしていると思われるかもしれない。

「んん、まあ。そういう事なんですよ、白砂さん」

「そうだったんですか、よかった」

意味深長なことを口走る白砂さんになんと声を掛ければいいのか、小心者の僕には分からない。すると獺也が単刀直入に言った。

「『よかった』ってなんだよ、どういう意味だ？」

「おいこら、獺也！ 略して馬鹿」

「俺の名前をどう略そうがお前の勝手だが、どう略したとしても『ばくや』は『ばか』にはならないからな？ なんだよいいじゃねえ

「かよ、友だって気になっただろ？」

そこで、白砂さんが割って入った。

「あの！ 別に変な意味とかじゃなくて、その、テレビに顔が映っているときから『この人は悪い人じゃない』って思ってたんです。この人が悪い事をしたのには何か理由があったんじゃないかしらって」

なるほど。

もしかすると国民全員が白砂さんのような人だったら、獏也の人生はもう少し輝いていたのではないかと、そう思える。

しかしどうだろう。

この話をすることには是非も無いが、結構時間が掛かってしまうだろう。さっきから置いてきぼりをくらっている小石さんと識乃ちゃん可哀想だ。

「識乃ちゃん、先に家に帰ってお……」

隣どうしに座っていたのが幸いしたようで、識乃ちゃんと小石さんは二人で楽しそうだった。耳元で何かを囁き合っている。なんの話をしているのだろうか。

まあ。

まあ、いいや。

「こいつはですね、白砂さん。自らの命を僕との友情の為に簡単に投げ捨てたんですよ」

……、我ながら格好いい台詞を吐いたつもりだったのだが、白砂さんはポカン顔だった。

「あー、えつとですね。つまり……、文字通りなんですが、僕が訳あって警察に殺されそうになった時に、こいつ関係無いのに僕を庇って警察に喧嘩を売ったんですよ。殺人って方法を使って。『ここは任せて先に行け！』って感じですね、あはは、はは……はは」

「あまり……、笑えないですね」

「ですよー」

「ですよー」

「……………」

まあ、この話をしたところでこんな雰囲気になることは想像していたし、目の前に居る人間が二人とも犯罪者だと分かってしまえば白砂さんの心中も穏やかではないだろう。

「でも、やっぱりそうですね」

不意に白砂さんが納得したような事を言い、僕を戸惑わせた。

「な、何がです？」

「あ、すいません。彼、仕事よりも自分よりも恋人よりも『友情』を優先する方に見えましたので」

「……………」

この方の趣味は『人間観察』か何かなのだろうか？

その『友情』が僕という存在を指しているというそれ自体はありがたいのだが、『恋人よりも』と言うのはどうだろう？ 複雑な気持ちになるな。僕としては、『恋人』を超えてしまっている時点でそれはもう『友達』の範疇では無い気がするのだが。……もう、それは、恋人なのではなからうか。

まあそんな感じでその後も意味の無い会話をし、特筆するようなことは何も無い、つまらない別れの挨拶を交わし、十歩も歩かず帰宅した。今思えば、もう少しちゃんとした会話をしていればよかったと思う。そして、もっとちゃんと丁寧にさようならをしていればよかったと思う。

その後三人が各々の用事でバラけ、僕は自宅に居たのだが、まあ兎に角。

識乃ちゃんが、午後四時に帰ってきて。

獏也が、午後五時頃に帰ってきて。

そして、おやつ時に白砂さんが我がアパートの影で他界していた。後に聞いた話だが、その時間達真美さんはお出かけをしていたそうだ。

第七話というか、第三戦の三回表・マイナス伍対貳

@x10 @@@@

小石さんは次の日の夜まで泣いていて、何も話せなかったという。僕はと言えば、識乃ちゃん、獏也とともに警察で一夜を過ごした。またしても崎波美風さん、浦安俊杜さんペアのお世話になってしまった。

『つはあー、お前ら……、世話掛けやがって』

昨日駆けつけた時の浦安さんの第一声。

第一発見者が僕であつたので、まあ世間一般的の良心に則り、警察に連絡をした。

実際に遺体を発見した時刻は六時二十五分であり、その時の遺体の状態は実に酷いものだった。アパートの裏階段に倒れていた遺体は死後硬直で異様なポーズになっており、どす黒く固まった白砂さんのものと思しき血液が階段と白砂さんの白い肌を汚らしく染めていた。白目になりかけている虚ろな瞳には何かを追いかけた様子は無く、彼女が犯人に気付く間もなく殺害されたことを示していた。

そして出血口は喉元だった。

喉元を鋭い何かによって掻つ切られていた。

……………。

ピエロ。

まあそんな感じで現場説明を終えて、現時刻へと戻ってくる。

「まさか椅子に座らせられたまま眠る事になるとは思いませんでしたよ、腰痛い、腰痛い」

「寝ていいって言われてないんだけどね。実際、僕と獏也は寝てなかったし。獏也なんて偉いんだぞ、識乃ちゃん。こいつずっと黙ってたまま僕と警察官との会話聞いて、一晩過ごしてたんだから」

「いや、俺は一晩目を開けたまま寝てたぞ」

……。

何となく想像してたけど。やっぱりそうだったか。

昨日浦安さんに渡されたFAXをポケットから取り出す。

「昨日からずっと見てますけど何が書かれてるんですか？ それ」

「うん。ほら、書置きがあつたでしょ？ 『すぐに正式な捜査協力

依頼がそっちに行く』って奴。これがそれを促す書類。ピエロとしては、おそらく獏也が殺されかけたあの日に届けたかったんだと思うよ、ホラここ、送信日があの日だ」

「じゃあ何で今更？」

「浦安さんがピエロの予想よりも早く飛び出しちゃったんだろうね、きつと。持たせ忘れたんだろうね。その後、連絡が来てもおかしくはなかったとは思うんだけど、そこにどういう経緯があったのかは知らないし今となってはもう遅いんだけど、まあその経緯があつて昨日やつと僕の手になんか渡されたってわけなんだよ、きつと」

「長い道のりの上に、無駄足だったわけですね」

「ひつでー話だな、おい。人一人殺されちまつたじゃねえか。……

はあ」

「いや、ここにも書いてるけれど、おそらく彼女はどの道殺されてたんじゃないかな」

さて。

さぞかし気になっていることだろうと言うことで、お見せしよう。
このような内容だ。

『市警方々、ごきげんよう。ピエロという者です！ さて、今回こちらにFAXさせていただいたのは他でもない。なんと！ いえ、その前に前置きが必要ですね。最近、この地域界限で起こっている連続殺人事件であります、アレ、犯人、私です¥（＾o＾）／
つてなわけで本題です。これからまた被害者が続々と出ると思
うのですが、おそらくこの地域の問題児、【笹本・朋見里・軒下】

なる三人が事件の鍵を握ってます。さつさと重要参考人としてしよっぴっちゃってください。言う事を聞かないなら、また一人犠牲者を出してしましましょう。例のアパートの住人で。詳しいことは馬鹿三人に聞いてください。そうですね、期限をつけたほうが面白い。では下記の日付までに何とかしちってください』

その下に書かれていた日にちはちょうど昨日の日付になっていた。ずいぶんとふざけた文章だ。文章が統一されていない。チグハグ感たっぷりである。警察を見下している風に見える。実際、見下しているのだろう。当然、警察は『イタズラ』の一言で片付けたに違いない。事が起きるまでこれが僕に届かなかったのも頷ける話である。

僕達には『警察に頼め』と言い、警察には『僕達に頼め』と言いのらりくらりと上手く構成されている。結局僕達が警察としっかり協力できないように細工されているらしい。随分と頭の切れる人材が『ピエロ』には存在するらしい。もしかするとリーダー格なのかもしれない。それともどうだろう。複数人でこれ考えたのかもわからない。

だがまあ、僕らを犯人に仕立て上げようとしたのは腹立たしい。おそらく彼らは僕ら三人が容疑者になるタイミングを見計らったのだろう。特に僕だ。獏也と識乃ちゃんはお出掛けていたので、他の住人と同じような扱いなのだが、何せ僕は、当時白砂さんの肉親以外で現場にいた唯一の住人なのだ。正確にはあのアクの強い大家さんが居るのだが、彼女に容疑が掛かることは無いだろう。と言うわけで晴れて僕が第一容疑者になったのだった。

しかしまあ、手口がアレなので流石にいきなり拘置所に行くようなことはなかった。なんだろう、ピエロの頭が切れるのか、抜けているのか、よく分からなくなってしまった。それにしても。

《何かが起こるまで何もしない》

一昨日の自分の考えが恥ずかしい。いきなり事務所に押し入ってくるような輩なのだ。少し考えれば、簡単に人が死んでしまうことは安易に想像できたはずなのだ。

小石白砂さん。

本当に美しい方だった。絶世の美女と言っ言葉があればほど似合う女性もいない。

小石飛礫さん。

今回の事件は完全に僕の責任である。そもそも彼女はウチのアパートの住人でないのに。

……………。

「帰ろうか、二人とも」

「へ？ でも小石さんは？ ってかいいんですか、調書とか。分厚い紙の束渡されてませんでした？ ……、あれ！ 今気付きました。あれどこやったんですか？」

「全部書き終えたよ。取り敢えず帰って良いってことになったから。小石さんは……、僕達が触れるのは失礼だ。僕らが関与しているかどうかは別として、あの兄妹には僕らみたいなのが触れるべきじゃない」

「んなもんかね、……んなもんか。そんじゃシキノン、友、うちに帰っか」

締めを括つたのは以外にも獏也だった。

@x10 @@@@

帰宅して、僕は取り敢えず一眠りした。そして獏也と識乃ちゃんと言うと、やっぱり一眠りした。目が覚めるとちょうどお昼時だったので、二人を叩き起こして外食することにした。どこへ行こうか？ と問うと、識乃ちゃんが目を擦りながら「お寿司」と答えた。

かくして、例の大通り沿いの寿司屋に席を移した僕らはあまり騒ぐこともなく淡々と寿司を喰らった。食事中の会話についてこだわりの持たぬ僕としては「静かでいいな」程度にしか考えなかったのだが、そう言えば識乃ちゃんが喋らないとは珍しい。加えて、獺也の無言も珍しい。僕は俯き、寿司を絶え間なく口に運びながら物珍しさで目だけは二人に向けた。どうやら、二人とも気まずそうにしているようだ。識乃ちゃんは眉間を皺くちにし、思案顔である。

当然僕は彼女ではないので、今彼女が何を考え、何に思い悩んでいるのか僕には分からない。それでも今回のピエロの件で小さなおつむをフル回転させているのではないかと予想できた。続く獺也だが、……この顔はなんなのだろう？「どうでもいい」といった顔をしているのだが、何が「どうでもいい」のかは定かでない。しかし脱力的な顔をしている。だらしのない顔と言い換えてもいい。それでいて、どこか達成感に満ちたような笑みにも見える。なんと言うのだろうか、あの、夏休み最終日に宿題をやり終えたその直後のような顔をしている。残念ながら、僕は夏休みに入る前に課題を終えるタイプだったのでそんな経験はないのだが。きっと、獺也も今回の件で思うところがあったのだろう。

——うん。どうしたらいいのかな。声を掛けてみるか否か。

まずいことになった。うるさい二人に慣れすぎて、時間が経つにつれて静かに食事をしているこの時間をどうにかしたいと思ってしまい始めている。

自分を押さえ込むために、ふと店の外の大通りに目を向けると知った顔が通り過ぎて行った。

それは、ピエロの一人、最悪の道化師。

ヤザキナコ

矢崎那子、その人だった。

第八話というか、第三戦の三回裏・マイナス伍対貳

@×20

獭也、おい。アレ、矢崎那子やさきなこじゃないか？

獭也の視線が窓の外に向けられた僕の人差し指を這う。そしてその延長線上に居る人物をその目が捉えると、獭也は「あ」と声を出した。その後、僕に「ちよつと行つて来る」と言つが早いか獭也は席を立つた。僕の目にはソファを出た獭也の背中と先程まで獭也が摘んでいた鮪がテーブルに落ちていく様子がスローモーションに写った。視界の隅で識乃ちゃんが、よく分からないと言つた風に口をもぐもぐしている。

五分ほどして帰つてきた獭也、他一名を僕と識乃ちゃんは忙しく口を動かしながら迎えた。他一名、那子さんは後ろ手に腕を掴まれ、息が上がっていた。

「おい、なんだよお前ら。折角捕まえてきたのに」

「いや……、だつて捕まえて来いだなんて言つてないし」

「言つてないです」

獭也は僕らに鋭い視線を送ってきたが、僕は肩を竦めてやり過ぎた。そして那子さんに「まあ、どうぞ」と着席を促した。那子さんは「クツ」と声を上げ獭也の手から逃れようと体を擦じらせたが、諦めたのか暫くしてから腰を下ろした。

「お久しぶりです、那子さん」

「誰が下の名前で呼ぶことを許可した」

僕はその返答に満足して、口角を吊り上げた。

「あれ？ 偽名では無かつたのですか？」

「なっ……、お前、図つたな！」

「こないだ、即座に否定しましたよね？ 急にあんなになつたから

少し『あれ?』と思ったんですよ。ほら。識乃ちゃんってあつけら
かんと言つか何と言つか、まあ、こんな性格だから嘘が付きにくい
んですよ。僕が身を張って実証しましたから間違いありませんね、
はは」

僕が話している間、那子さんは絶えず悔しそくに「うう」と唸っ
ていた。

殺人グループにプライベートなどと言うものがあるのか、僕は殺
人グループに所属したことが無いので分からないのだが、どう見て
も今の彼女はその状態だった。はつきり言ってセンスの良い私服だ
とは思えなかったが、自分で選んだのであろうその服装が、よりプ
ライベートらしさを演出していた。

識乃ちゃんが耳打ちをしてきた。「トモさん、トモさん。」

「トモさんだつて人のことをやいやい言えるほどセンスよくないで
すよ?」

「だから、人の心を読むな。っていうか面と向かってセンス無いと
か言ってくれるなよ」

そこで那子さんが「おい、笹本」と口を挟んだ。

「さつき、『捕まえなくていい』みたいなニュアンスなことを言っ
てなかったか?」

「ええ、まあ」

「なら、逃がしてくれないか? あまりこついう事には慣れてなく
てな。拷問とか——」

言つ途中で獏也が微笑みながら那子さんの口に鮪の握りを押し込
んだ。そして、僕が微笑みながら言った。

「いや、でもですよ。ほら、那子さんお寿司食べちゃったじゃない
ですか。食い逃げはいただけません」

那子さんはモゴモゴと日本語ではない謎の言葉で反論してきたが、
獏也は那子さんの口の中に空洞ができるたびに新しいネタをそこに
押し込んだ。

周りに客はおらず、店主もこちらを気にしている様子はない。い

や、気にはなっているのかもしれないが、それでも気にしていないフリをしてくれていた。

僕はまだモゴモゴ言っている那子さんに話しかけた。

「では、特に反論も無いようなのでこのまま話を続けさせていただきます。まずですが、あなたは『ピエロ』の中でどういう立場なのですか？ …… ちよつと獏也、そろそろいいよ。那子さんが答えられないよ。というか結局、その皿の分は僕が払わなくちゃならないんだろ？」

「おお、そうか。悪い悪い。」

獏也は手を止め、那子さんを開放した。彼女の前にはすでに十枚近くの皿が積み重なっていた。もはや拷問である。むしろ拷問以外の何物でもない。酒や水に致死量があるように、寿司にも致死量があるのだろうか。もし致死量があるのであれば、おそらく彼女はすでに死んでいるだろう。

暫くして、那子さんとはとつとつと話し始めた。

「…… んっむご。その、なんだ……、黙秘権は行使でき……… 待って、水もらっていい？」

「はい。どうぞ」

彼女の口調が砕けたことで拷問の恐ろしさを再確認しつつ、なるべく平常を装った。もう少し彼女との会話はできそうにない。

ふと見れば、識乃ちゃんがテーブルに項垂れていた。「どうしたの？」と問うと、どうやら食べすぎで気分が悪くなっただけらしい。

「トモさん一旦帰りませんか？ 回るお寿司を見てると目が回ってきて、吐き気に拍車を掛けます」

「黙れ。気持ち悪くなるまで食べる君が悪い。多分僕のセンスを馬鹿にした罰が下ったんだね」

こんな物静かな僕の周りに、何故こんな野生動物のように騒がしい面々が集うのだろうか。

「大丈夫ですか？ 那子さん。そろそろ答えてもらっても？」

「あ、ああ」

那子さんは戸惑いながらも頷いた。僕はそれを確認した上で、掌を宙に泳がすようにして先を促した。「では。お願いします」

「答える前に言うておくが、お前たちがウチをこうして拉致したことはお前たちにとってマイナスにしかないぞ？」

「それはそれは好都合です。今、残念ながら自爆しまくってましてね。点数で言うともマイナス五位になっているんですよ。偶然とは言えあなたを捕まえてプラス二としてもマイナス三のままですしね」

那子さんは体を起こして、訝しげに首を傾けた。

「だったらなんで好都合なんだ？」

「だってほら」

だってほら、と前置きしてからできる限りニヒルに言った。

「マイナスにマイナスを掛けると、プラスになるじゃないですか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8518o/>

笹本カウンセリング事務所

2011年8月15日03時27分発行